

第1回 英語教育改革FD

～CALL教材の可能性を探る～

日時：平成18年12月4日（月）10:00～12:00

場所：総合教育研究棟 D棟1階 大会議室

プログラム

- (1) 開会の挨拶（河野正司：新潟大学理事（教育担当）、全学教育機構長）
- (2) CALL 試行授業に至った経緯（恩田公夫：新潟大学教育研究院人文社会・教育科学系教授）
- (3) NetAcademy スタンダードコースのデモ（門倉理恵：アルク教育社）
- (4) Listen to me! のデモ（高橋歩）
- (5) CALL 試行授業報告（高橋歩，ハドリー浩美，平野幸彦）
- (6) 効果測定結果報告（平野幸彦）
- (7) 来年度の方針・今後の展望について（平野幸彦）
- (8) 閉会の言葉（司会）

講師：	平野 幸彦	新潟大学人文社会・教育科学系助教授
	高橋 歩	新潟大学非常勤講師，新潟薬科大学講師
	ハドリー浩美	新潟大学非常勤講師
コメンテーター：	関 昭典	県立新潟女子短期大学助教授
司 会：	秋 孝道	新潟大学人文社会・教育科学系助教授

主催：「英語教育改革」作業委員会

(1) 開会の挨拶（河野）

こんにちは、河野でございます。お足元の悪い中、お集まりいただきましてありがとうございます。

ご存じのごとく新潟大学における英語教育は、「全学の英語」と「専門分野に対応する学部英語」という形で行われておりますが、「その全学の英語をどのようにしていくか？」ということにつきまして、これまでにいろいろな場面でディスカッションが行われてきました。

我々が大学教育を考えるとときには、「現在、世の中で、これに関してどのような議論が行われているか？」ということについても、敏感である必要があります。そういう意味で、ある1つの状況を表しているものとして、中教審が出してきます答申について、やっぱり注目せざるを得ないと思います。高等教育に関する答申についてみますと、平成17年1月に大学教育を中心として「我が国の高等教育の将来像」と題する答申が出た後に、9月には「新時代の大学院教育の構築に向けて（副題：国際的に魅力ある大学院教育）」という大学院に関する答申が出ております。中教審答申のこの最も新しい2つが、大学あるいは大学院、すなわち高等教育に対するものであります。これらの答申に基づいた政策が、文科省からいろいろ出されてきておりまして、「大学院教育の実質化」というのが最新のものであるというわけでありまして。

この大学院に関する答申、すなわち大学院教育というものを魅力あるものとするということにつきましては、副題として、「国際的に魅力ある」と書かれてあります。「国際的に魅力ある」と言いますと、日本の大学院教育を国際的に通用する大学院であり得るようにする、日本の大学院が国際競争で勝てるものにする、ということでありましょう。

現在、東アジアの留学生がたくさん日本の大学に来ておりますが、実情を見ると、それらの国の最上位レベルの学生は、アメリカ、あるいはヨーロッパに留学して、その次のレベルが日本に来るようがあります。それをどうにかして、一番上のレベルの学生が日本に来るようにするというのも必要な1つでありましょう。また我々の新潟大学内に限ってみても似たようなことがあるわけで、新潟大学の学士課程教育を出た学生さんの一番上のレベルは、ひょっとすると新潟大学の大学院に来ていないんじゃないか、というのは、皆さんご承知だと思います。新潟大学の大学院が魅力あるためには、やっぱり、新潟大学のトップレベルの学生が行きたくなるような大学院でなければいけないのではないかと、とも言えるわけでありまして。

国際化ということは、現在いつも問われるわけですが、そこでは英語が欠かせないということでありまして。ほとんどの領域で、英語。私の専門としている医歯学の中でも、解剖学の専門誌に1886年から続く *Anatomischer Anzeiger* というドイツの有名な雑誌がありますが、現在は雑誌の表題だけはドイツ語ですが、中身はほとんどが英語で書かれた論文となっております。というふうになると、英語を大事にする必要がいよいよ増してきたといえましょう。

「その英語の教育は、どうあるべきか？」ということでも長い間議論をしてきました。ここ2年間の議論の中では、全学の英語教育を考えるとときに、新しい methodology（方法論）を入れていくべきであろうということになりまして、現在の進んだ IT を使った CALL システムについて検討し、いろいろな大学を視察して、どのように導入されているかを学んできました。そして本年の4月から全学英語の3クラスにおきまして、それを試行的に使っていただいていたわけでありまして。

今日のFDはこれらを基にあるわけでありまして、新潟大学において、CALL システムがどのように使われてきたか、さらには今後どのような展望を持っていけるのか、ということも、議論いただければ幸いだと思っております。

本日は、学外からも講師の先生としておいでいただきまして、大変ありがとうございます。先生方をお招きして、この会が有意義なうちに進行しますように願って、ご挨拶とさせていただきます。どうもありがとうございました。

(2) CALL 試行授業に至った経緯（恩田）

おはようございます、経済学部 恩田です。ここ数年、全学英語（いわゆる教養英語）の実施部門の責任者として関わってきたということ、それから今日のFDの主体になっております「英語教育改革」作業委員会の一員でもあるということで、私から「どうしてこのような CALL 授業の試行をすることに至ったのか」について、簡単に経緯を説明させていただきます。

まず、CALL 試行授業、あるいは今日のFDを開催することになった、そもそもの発端について申し上げます。

平成 15 年 11 月（今から 3 年前）の教養教育実施委員会で、濱口委員長から非常勤講師の削減問題に取り組むため、「ワーキンググループを設置したい」との提案がなされました。そして、その提案が了承されたのを受けて、「共通英語教育のあり方と非常勤講師に依存しない実施体制を検討するため」として「WG 分科会 2」が設置されました。これがその後の英語改革へ向けての一連の動きの始まりでした。

それまで、平成 6 年の教養部廃止以降、全学の英語教育は、「ブロック制」、あるいはその後を引き継いだ「協力学部制」という名前の体制をとっており、英語教育を担当する専任教員は 3 つあるいは 5 つに分断されていました。全学的な視点から英語教育の見直しを図ろうにも、そのための母体となる組織がない、というのが実情でした。英語教育全体について大きな見直しを迫られる中、平成 16 年 2 月下旬、共通英語を担当している専任教員が一堂に会し、話し合いを行いました。そして、これからは全学的な観点から、一元的に英語教育の企画・運営をしていく組織を作り、その組織を中心にして、改革案を作成し、全学に提案していこうという方針を決めました。そして直ちに全学英語教育委員会という組織を立ち上げ、改革案の作成に取り掛かりました。

英語スタッフがまとめた改革案は、「習熟度別クラス編成」、「TOEIC による到達度測定ならびに単位認定」、「授業の質的保証をはかるための統一副教材の使用」を柱として、授業の大幅な効率化を目指したものでした。この案を分科会、教養教育実施委員会で検討していただきながら改訂を進め、さらに平成 16 年 5 月には英語担当教員がすべての学部へ赴いて説明会を行って理解を求めるなどの努力を重ねました。

そして、この改革案は、教養教育実施委員会の後を引き継いだ全学教育機構設置準備委員会でさらに検討がなされた後、平成 16 年 7 月に、「新潟大学における英語教育改革の方針案」という名前で、大学教育委員会に提案され、8 月の同委員会で承認されました。

この「方針案」の骨子は概略以下のようなものでした。

新潟大学の英語教育については、e-learning の活用を含む多様な学習方法の導入、専任教員を配置した英語教育センター（仮称）の設置を含む企画実施体制の抜本的刷新などの課題を検討するため、全学教育機構の企画部門の中に、全学的英語改革案を検討する作業委員会を設置する。ただ、その抜本的改革案の実施までにはなお数年の時間が必要になることから、

その間の暫定的な措置として、教養教育実施委員会で検討されてきた「英語教育改革案」を基礎とした英語教育を平成 17 年度から実施する。

こうして、平成 17 年度から実施される新たな英語カリキュラムは、抜本的な改革が実施されるまでのいわばリーフの役割を担わされることになりました。と同時に、この新たな英語カリキュラムがスタートする前から、すでに、その後の抜本的改革について検討するための作業委員会が立ち上げられ、活動を開始することになりました。

平成 16 年 12 月、全学教育機構設置準備委員会の中に、「英語教育改革」作業委員会が発足。以来、現在まで、当作業委員会ではさまざまなことを検討してきましたが、その中心には常にコンピューターを利用した外国語教育（Computer Assisted Language Learning 略して CALL）がありました。それは、大学教育委員会から本作業委員会に課せられた課題の中に「e-learning の活用」ということが盛り込まれていたためであります。また一方では、昨今、多くの大学で英語教育改革の柱として CALL の導入をはかっているということもありました。

当作業委員会では、委員自身がまず CALL そのものへの理解を深めるために、CALL 教材のデモをしてもらったり、CALL を活用した大学英語教育についての研究書を読んだり、また、CALL を導入して先進的な語学教育を行っている京大、東北大、千葉大に視察に行ったりしながら検討を重ねました。

その一方で、平成 17 年 5 月には、CALL システムの導入を柱とする改革の素案をまとめ、各学部からの意見を求めました。その結果、各学部から寄せられた意見では、「CALL システムそのものがよく分からない」とか、「その有効性について疑問がある」といった消極的、あるいは懐疑的な意見が目立ちました。そこで、当作業委員会では、委員以外の教員各位にも CALL についての理解を深めてもらうため、CD-ROM 型の代表的な CALL 教材である「Listen to me！」を各学部配布したり、ネット利用方式の「NetAcademy」を学内の教員なら誰でも試してみることができるよう手配しました。また、CALL の有効性について調査するために、平成 18 年度の 4 つの英語クラスで試行的に CALL を利用した授業を実施し、その効果を客観的なテストで測定することにいたしました。そして、人文学部の平野幸彦先生、非常勤講師の高橋歩先生、ハドリー浩美先生にご協力をいただき、また、教務課からのバックアップを得て、試行授業が実施されることとなった次第です。

今日これから報告がなされる CALL 試行授業は、おおよそ以上のような経緯によって実施されたものです。

(3) NetAcademy スタンダードコースのデモ（門倉）—— 省略

(4) Listen to me ! のデモ（高橋）

デモンストレーションに入る前に、資料 2 の最初のページを簡潔に説明します。「Listen to me！」シリーズは、竹蓋幸生千葉大学名誉教授を中心としたプロジェクトチームによって作成された、大学生用 CD-ROM 教材です。特徴は「3 ラウンドシステム」という学習方法が取られているということです。例

えばストーリーが3つあったとすると、そのストーリー1, 2, 3を、ラウンドを3つに分けて学習します。第1ラウンドの目標は「内容の大まかな理解」で、ストーリー1を聞かせ、細かい内容には触れず大まかな理解をさせ、次のストーリー2の学習へ移ります。ストーリー2でも同じように大まかな理解をさせます。その後、ストーリー3でも同様の学習を行い、第1ラウンドを終えます。次に第2ラウンドに入り、まず、ストーリー1を再び学習します。今度は「正確・詳細な理解」をさせることが目標になります。この目標のもと、具体的な数字や内容を聞き取らせながら、ストーリー1, 2, 3と学習を進めていきます。その後の最終ラウンド（第3ラウンド）では、「話者の意図や結論などを理解させる」ことが目標となります。学習済みのストーリー1, 2, 3をまた学習し、より深い理解を目指します。同じ素材を3回に分けて学習することで、タスクに相互関係を持たせることが可能になります。また、各ラウンドの学習時に感じる難易度を下げることが可能になります。さらに、1つの素材を連続的にではなく、他の素材の学習を挟んで、断続的に学習することにより、分散学習の効果が期待できます。それでは、デモンストレーションに入ります。

この教材は Listen to me ! シリーズの「First Listening」で、初級レベルの大学生用学習教材です。TOEIC スコア 300~400 程度の英語力の学生を対象にしています。授業ではフロッピーディスクを学生に持参させ、学生記録を保存させました。「保存するメディア」で「フロッピーディスク」を選び、氏名と学籍番号を入力します。この教材は、ユニット1~ユニット6までの6ユニットで構成されています。メニュー画面のユニット1にカーソルを合わせると、学習者がこのユニットでどの程度学習を進めているかがパーセンテージで表示されます。「進捗表」もあり、学習者がどこまで学習を進めているかが一覧表に表示されます。

ユニット1の最初の画面では「セクションを通して聞いて、教材の展望と学習への心の準備をしよう」というメッセージが表示されます。学生はまず、ダイアログを聞きます。その後、次へ進むとタスクが出てきます。もう一度聞いて、キーワードとなりそうな単語またはフレーズを拾います。次に「聞いたものにクリックをしましょう」という指示が表示されます。「words」と「phrases」という黄色いタグが出ました。「words」をクリックすると、キーワードのリストが提示されます。意味や発音のわからないものをクリックすると、意味が表示され、音声で発音の流れます。辞書を引く必要はありません。

次に「どんな場面なのか推測してみましょう」と表示されます。学習者は、ここまですべて何回もダイアログを聞いているので、答えはすぐわかります。「図書館での本の貸し出し場面」だとわかったところで、ストーリー1の第1ラウンドが終了します。このラウンドは大まかに「今、何をしているのか」がわかったところで終了します。同様にストーリー2, 3……と、ストーリー7まで聞き、どのストーリーも大まかな内容理解をして、ステップ1（第1ラウンド）が終了します。

その後ステップ2（第2ラウンド）に入ります。このラウンドの目標は「正確・詳細な理解」です。ステップ1と同じストーリーを聞きますが、タスクがやや複雑になります。第1ラウンドで学習したストーリー1の「図書館での本の貸し出し」時のダイアログでは、「最初に持っているかどうか尋ねられたものは何ですか?」、「利用者カードの代わりに、持っているかどうか尋ねられたものは何でしょうか?」などの詳細な情報を聞き取るタスクになります。これを終了すると、次のストーリーへ進むことができます。このあとストーリー7まで同じように内容を理解しながら学習を進め、ステップ2が終了します。

最終ステップ（第3ステップ）に、入ります。ここでストーリー1の「図書館での本の貸し出し」の最終学習をすることになります。このステップでは、「話者の意図や結論などを理解させる」ことが目

標で、「なぜ署名をするようにと言われたのでしょうか？」などのタスクが提示されます。解答がわからない学習者のために「ヒント」が表示されます。このステップで話者の意図などを理解し、そのストーリーを完全に理解した後、ようやくダイアログのスク립トが表示されます。ダイアログの内容を文字で確認したがる学生は多いようですが、ここに到達するまでそれはできません。このようにしてストーリー7までの第3ステップの学習が終了すると、ユニット1が終了します。

学習を終了するには「Quit」をクリックします。すると、その日の学習記録がフロッピーディスクに自動的に保存されます。

(5) CALL 試行授業報告

(高橋)

資料3をご覧ください。私は工学部2年生の発展英語を担当しました。受講者数は23名でした。第1マルチメディア教室を使用し、CALL用初級教材 Listen to me! 「First Listening」を使用しました。90分授業の時間配分は、最初の35～40分が小テストやディクテーション（穴埋め式の聞き取り問題）の実施とその答え合わせ、残りの約50分間が各自で行うCALL教材の学習、としました。学期の初めと終わりに実力テスト（A.C.E.プレースメントテスト）を実施しました。

「First Listening」は、自主学習用教材なので、学習を進めていくための目安として、2週間に1度、15分程度の小テストを実施しました。テスト範囲の学習は授業中に終わらせても良いし、間に合わない場合は自宅コンピューターなどを使って学習することとしました。ただし、意欲のある学生は指定範囲を超えて学習してもよい、ということにしました。小テストはコンピューターを利用するものではなく、紙で作成しました。教材のスク립トはコピーできないようになっているので、小テストを作るのに不便でした。小テストの答え合わせをする際には、教室に備え付けられたカメラで解答を撮影し、ひとりひとりの学生のコンピューターの画面に映して確認させました。ディクテーションもコンピューターを利用したものではなく、紙を使って行いました。「First Listening」を利用したディクテーションを行いたかったのですが、教員のコンピューターの音声を学生に一斉に聞かせることができなかったため、別の教材を利用したディクテーションにするしかありませんでした。

成績評価は、小テスト、ディクテーション、教材の学習記録を合わせて50点で評価し、学期の終わりに実施したA.C.E.プレースメントテストの点数を50点とし、合計して評価しました。

授業をしていて気付いた点を挙げます。教材の使い勝手は概ね良かったようですが、始めのうちは「音が出ない」、「フリーズしてしまった」など、教室のコンピューターの使い方がわからなかったり、間違ったりする学生も少なからずいました。また、長時間コンピューターに向かって黙々と学習を進めるため眠くなる学生がいました。学習記録を保存するためのフロッピーディスクを忘れてくる学生がいたので、手書きの学習記録用紙も併用させました。さらに、授業外で学習することが困難だという学生が数名いました。その理由は、自宅のコンピューターにフロッピーディスクドライブがないので、学習記録を保存することができない、工学部のコンピューターにフロッピーディスクやCD-ROMが入らない、などでした。

(ハドリー)

非常勤講師のハドリー浩美です。どうぞよろしくお願いたします。

資料 4 をご覧ください。私が担当しましたのは、工学部 2 年生向けの発展英語でした。90 分授業で 15 回となっているのですが、実際は登録期間とかテストの期間などがありまして、授業回数は実質 10 回程度だったかと思います。聴講生は 2 年生 19 名で、昨年度受験した TOEIC のスコアが 470 点に満たない学生でした。使用教室は、第 2 マルチメディア教室。教材は、ただ今、高橋先生がデモンストレーションされた Listen to me! 「初級」の 1 つ上の Listen to me! 「初中級」で、その CD-ROM を学生に貸与いたしました。平野先生や高橋先生との事前の打ち合わせで、このクラスでは Listen to me! 「初中級」以外の教材を使用しないで、それだけで行ってみることにしました。この教材ですが、サブ・タイトルが「Introduction to College Life」で、カリフォルニア大学バークレー校の教職員や学生の皆さんへのインタビューを素材としたもので、音声はナチュラルスピードです。インタビューですので、会話と違って 1 人が長く話します。内容は講義の概要・キャンパス情報・学生の日常生活についてなどで、いずれも大学生として習得してもらいたいコミュニケーション能力のレベルであると思われます。それではこれから、毎回の授業の流れをお話いたします。

毎回授業のはじめに、前回の学習指定箇所に関する小テストをしました。小テストの内容は、第 1 ラウンド目は、「英・日の単語テスト」で約 10 分くらい、第 2 ラウンド目は、「部分ディクテーション」で、10 分～15 分くらいかかりました。第 3 ラウンド目は、まず「日・英の単語テスト」を 10 分くらいで行い、その後、音読テストを行いました。これは、他の学生が CALL 学習をしている間に 1 人ずつ前に来させ、私に向かってインタビューの SCRIPT を音読させるテストですが、1 人 3 分くらいで自宅での音読練習の成果を測りました。毎回小テスト後には、「今回は、ここまでやりましょう」というように今週の学習箇所を指定し、それを各自のペースで学習させました。授業中に終らなかった部分は宿題としました。高橋先生と同じように、「指定された箇所を超えて学習しないように」という指導はしませんでした。授業の終わりには、個別に質問を受け付けたのですが、こちらから聞き出さない限り、質問してくる学生はほとんどいませんでした。また、第 3 ラウンド目（つまり、3 週間毎）には、個別の学習指導や相談も行う予定でしたが、時間の関係で実際は 1 回しか行えませんでした。以上が授業のおおよその流れになります。

次に、実際に CALL 授業を行ってみて気がついた点をお話いたします。当初は、クラス全体でコミュニケーション活動をする予定だったのですが、2 つの理由で今回は実施しないことにしました。1 つは、先程も高橋先生からお話がありましたが、CD-ROM の音声を全員一斉に聞かせる機能と、SCRIPT をプリントアウトする機能がなかったことです。2 つ目は、実際に授業を始めてみると、学生が比較的集中して取り組んでいる様子でしたので、その流れを中断するのを躊躇してしまっただけです。その結果、長時間コンピューターの前に座って 1 人で勉強する形になりましたので、やはり眠くなったり疲れてしまったりする学生も出てきました。そこで学期の途中から、授業中に 10 分間、自分の好きなときに退出して休憩をとっていいことにしました。この休憩時間の利用者は 7 割程度でした。

次に、コンピューターの操作についてですが、今回は工学部の学生だったこともあり、ほとんど全員が自分のコンピューターを持っていました。教室でも操作に手まどうことはほとんどありませんでした。教材の CD-ROM も使い易かったという話です。また、学生が CD-ROM を忘れてきた場合に備えて、予備の CD-ROM をこちらで数枚用意しておいたのですが、それが必要となったのは 2～3 回だけでした。ほとんどの学生が毎回忘れることなく持ってきました。

次に、授業時間外での学習についてですが、自宅で行う学生がほとんどでした。大学の自習室や図書館などを使わなかった理由としては、ヘッドフォンが備えつけられておらず、また、声を出して練習できる環境ではないということが挙げられていました。また、それぞれの学生の学習箇所や学習時間を確

認するために、学習履歴が記録されているフロッピーを学期末に提出させました。自分のコンピューターにフロッピーディスクドライブがない学生には、CD-R で提出させました。しかし、中には操作がうまくいかず、手書きの学習履歴を出した学生もいましたので、記録の正確さは定かではありません。

それでは最後に、成績評価の方法についてご説明いたします。先程申し上げましたように、評価点は平常点 50%・期末テスト 50%として出しました。平常点は小テストと出席、そして学習状況の評価しました。学期末テストには、平野先生、高橋先生と同じく「A.C.E.プレイスメントテスト」を利用して、語彙・文法・リーディング・リスニングの力を測定いたしました。以上です。

(平野)

人文学部の平野です。よろしくお願いいたします。私が担当したのは基礎英語のクラスです。90分×14回の授業で、1回少ないのは休講が入ったためですが、このときは後日メールを使って学習指導いたしました。

聴講生は18名で、詳細は資料5に書いてありますが、様々な学部の2年生～4年生です。昨年度、基礎英語を不合格もしくは未履修の者——平たく言ってしまえば、再履修クラスです。教室は第3マルチメディア教室。マルチメディア教室の確保につきましては、教務課の方々にご尽力いただきました。お礼申し上げます。教材は先程デモンストレーションしていただきました、アルク NetAcademy スタンダードコース。評価方法につきましては、高橋、ハドリー両先生と同様、平常点 50%・2回目の実力テスト 50%といたしました。

授業計画につきましては、同じく資料5に記した通りです。大体標準的なのですが、1回目に聴講登録ガイダンス。2回目にレベル診断テスト。これをしないと、先程のデモンストレーションにもありませんように、学習が始まりませんので、まずこれをやらせました。3回目に第1回目の実力テスト。4～13回目までは、基本的に NetAcademy による学習を行いました。14回目に第2回目の実力テストを行って授業終了。ただし、のちほども申しますが、この授業は課外学習に非常に力点を置いていまして、こちらは8月4日の午後5時まで勉強させることにいたしました。

以下、学習の具体的方法ですが、授業の説明に入る前に、授業前に私が行っていたことを一言ご説明いたしますと、NetAcademy には「リスニング力強化コース」、「リーディング力強化コース」、「TOEIC テスト演習コース」と、大きく言って3つの学習コースがあるのですが、それぞれについて、管理者画面から履歴を打ち出して、学習状況を把握し、授業中に指導するための準備を毎回行いました。

さて、授業ですが、実際に学習を行った4回～13回について、概要をご説明いたしますと、まず着席後速やかに各自コンピューターを立ち上げて、NetAcademy にログインさせます。最初の50分間を使って、リスニング力強化コース及びリーディング力強化コースの教材を1ユニットずつ、こちらが指定して、それを各自学習するという形にいたしました。レベル診断テストで、それぞれ★★～★★★★が良いとか、★★★★～★★★★★が良いといった具合に、各人のお勧めレベルが指定されているわけですが、授業中には、平均的であると思われるレベル★★★★のものを指定しました。従って、それらについては全ての学生が学習したという形になっています。そしてこの学習をしている間に私が教室内を巡回しまして、一人ずつ学習を一旦中断させて、個別に出席調査、学習進捗の確認・指導、及び相談を受けるといった形にしました。このようなやり方で50分位学習した後、3分程休憩を挟みまして、これまたこちらが指定したNo.のTOEICテスト演習を各自解答させました。これは1回目の学習はNo.1、2回目はNo.2 というように順番にやってきました。従って、欠席した場合でも、どれを授業中に学習したかが分かりますので、休んだときにはあとで各自学習しておくようにと、最初に話しておきました。が、

なにぶん再履修クラスなので、それだけだと不十分だと思われましたので、必要に応じてメールによる指導も行いました。

課外学習については、「レベル診断テストにより推奨されたレベルの教材を中心に、できるだけ多くのユニットを学習すること」としました。NetAcademyは、学内でのみ利用可能なので、総合情報処理センター、IT自習室などに設置された端末や学内LANに接続した個人のパソコンからアクセスするように、と指導しました。学期の途中で、VPN (Virtual Private Network) を使えば自宅でもアクセスできることが分かりましたので、授業期間の途中からはそれを利用して、自宅から学習した者もいたようです。今学期も同じ NetAcademy を使った授業をしているのですが、こちらの場合は、かなりの学生がVPN経由でやっております。また、先程の報告にありましたのと同じ問題なのですが、学内端末にはヘッドフォンが備えつけられていないので、持ってくるようにと頻繁に注意していたのですが、それにも関わらず忘れてしまって、リスニングの学習に支障をきたした者が散見されたのは、少々遺憾でした。そして成績評価の基準・方法ですが、先程も述べましたように、NetAcademyの学習状況が50%・2回目の実力テストが50%です。実力テストについては、のちほど詳しくご説明いたします。NetAcademyの学習については、条件をより詳しくしまして、リスニング、リーディング教材ともに、1ユニットあたり——30分の時間をかけて学習するように作られているというお話でしたが、30分はなかなかかかりにくいようなので——せめて15分以上はかけて勉強するようにと言いまして、それで30ユニットずつ。つまり、リスニング、リーディングそれぞれ50ユニットありますから、教材全体の60%以上を学習する計算になります。あと、TOEICテスト演習全10回を期限(8月4日)までに学習することを、満点を与えるための条件としました。リスニング、リーディング教材のクイズ(3問から成る正誤問題)の成績については、特に問題にしませんでした。ただ、学習時間については、ある程度評価の判定材料といたしました。資料5に(参考)として掲げてあるのは、学生にも提示しました標準の学習進捗率で、単純に60%を14週で均等割したものです。「こんなペースで進めれば、平均的にやれるのではないか」と言ったのですが、これを守った者は、ほとんどおりませんでした。

このような授業をしてみて、行うのが望ましかったのですが、私のほうの準備やその他の事情でできなかったことが、いくつかありました。反省点です。

1つは、学習内容に即した小テストを行うことにより、英語力のより一層の定着を図ることができませんでした。テストを作るのが技術的に困難だったということもありますし、授業中は教材の学習だけで時間的に一杯だったということもあります。もう1つは、よりきめ細かな学習履歴管理ができませんでした。現行のバージョンのNetAcademyでは、教材を開いていた時間とクイズの解答状況しかチェックできません。ただ、これらの点につきましては、来年3月に導入予定のバージョンアップ版によって、よりスムーズに行えるようになる見込みです。

もう1つの反省点は、今回導入したCALL教材では、十分にカバーできない学習領域があるということです。これに対しては、別途何らかの形で手当てする必要があるだろうと思いました。これについては、のちほど詳しくご説明したいと思います。

(6) 効果測定結果報告(平野)

CALL教材を使用した全てのクラスに対して、外部団体による実力テストを用いた効果測定を、授業期間の初めと最後の計2回行いました。そのテストは「A.C.E.プレイスメントテスト」と言い、英語能

力評価協会（ELPA）という NPO 法人が行っております。本来は、大学入学時の英語力を測定し、大学でのクラス分けを目的とした試験です。2003 年度から実施されていて、1 年につき 1 種類の問題が作成されます。なので、現時点では 4 種類の問題が利用可能です。テストの構成は、総設問数が 60 問、試験時間が 60 分。採点は 0 点～300 点のスコアで出ます。内容の内訳ですが、リスニング問題が 14 問。これを 20 分でやって、スコアは 100 点満点。語彙・文法問題は 30 問ありまして、時間が 15 分。これが 100 点。それからリーディング問題が 16 問で 25 分。これも 100 点。それで、合計が 300 点となります。年度によりテストの難易度に差が生じないように留意して作成しているということです。年度毎の全受験者の平均スコアを見ますと、たしかにあまり差は出ていないようです。2006 年度だけ平均スコアが全体平均で 10 点下がっているのですが、上位 27% のスコアは変わっていません。つまり、下のほうが増えているらしい。しかしこれは、ELPA の見解によりますと、新課程で学んできていることが影響しているのではないかと、ということなので、テスト自体の難易度にそれほどの違いはないものと理解しております。

試行授業では、1 回目の実力テストには、3 クラスとも 2006 年度の問題を使用し、2 回目のテストは、発展英語のクラスは 2005 年度、基礎英語のクラスは 2004 年度の問題を使用しました。成績評価に関わる 2 回目の実力テストの種類を変えたのは、授業の曜限が違うことから、一斉に試験を実施することができないため、問題が漏れることを懸念したからです。

それでは次に、実力テストの結果について、お話ししたいと思います。資料 6～9 にテストの結果をまとめてあります。一見しただけでは分かりにくい資料なので、こちらでまとめてみたものをご報告させていただきますが、その前に凡例をご説明しておきます。一番上の行にアルファベットとアラビア数字の記号で書いてあるものについて、「2」と「1」は、それぞれ 2 回目のテスト、1 回目のテストを示します。1 回目のテストは 2006 年 4 月 25 もしくは 28 日、2 回目のテストは 7 月 25 ないしは 28 日に実施しました。T は全体スコアです。従って、「T2-T1」というのは、2 回目の全体スコアから 1 回目のそれを引いたもの、つまり合計点の上下幅を示します。他にもそれと同様の形となっております。V = 語彙の部門、G = 文法の部門、R = リーディングの部門、L = リスニングの部門となっております。

それでは、資料 6～8 について、比較してみた結果をご報告いたします。まず合計スコアはどのようになったかと申しますと、全 3 クラスでは +24 の上昇です。発展英語 2 クラス (Listen to me ! を使用) では +22。基礎英語のクラス (NetAcademy を使用) では +28。このように、全ての分け方においてスコアが上昇いたしました。その内訳を見ますと、語彙のスコアですが、全クラスでは +1、発展英語では +4、基礎英語では -4 と小幅な変化でした。つまり、発展英語はわずかに上昇、基礎英語はわずかに下降ということです。文法のスコアは、全クラスが +4、発展英語が +5、基礎英語が 0 で、発展英語はわずかに上昇、基礎英語は変わらずと、こちらも小幅な変化と言えます。リーディングのスコアですが、全クラスで +16、発展英語で +15、基礎英語で +17 と、全てにおいてかなり上昇しております。リスニングのスコアですが、こちらは全クラスで +3、発展英語で -2、基礎英語で +14。つまり、発展英語では小幅ながら下降したのに対し、基礎英語では大きく上昇いたしました。

これだけでもある程度のは分かるのですが、一応「念には念を」ということで、全学教育機構の熊谷龍一先生にお願いして、統計学的に分析していただきました。その結果をご報告いたしますと、合計スコアは、発展英語、基礎英語ともに得点が向上している。語彙については、全体としては向上していない——つまり、発展英語が向上し、基礎英語が低下している——統計学的に言いますと、「交互作用」があるということです。文法は、全体としても得点向上（ただし、これも交互作用がありまして、発展英語は向上しているが、基礎英語は変化なし）。リーディングについては、得点向上。リスニング

は、全体としても得点向上（ただし、これも交互作用がありまして、発展英語で若干低下、基礎英語では得点向上となっています）。つまり、合計スコアとリーディングについては、一応文句なく得点が向上したと言ってよいかと思えます。その他のもの、特にリスニングと文法については、向上したとはい切れないといった感じでしょうか。

この結果を受けての私なりの結論なのですが、NetAcademy という教材については、リーディング力とリスニング力の向上に資する効果は高いが、語彙力や文法理解度の向上をもたらす効果はあまり高くない。これは、NetAcademy スタンダードコースについての話です（NetAcademy には他にも、文法に主眼を置いたコースなど、多様な教材が用意されています）。このことは、教材の構成からして、不思議ではない結果と言えるのではないかと思います。あまり向上に資することのなかった能力を養成するためには、教材の使い方を更に工夫するか、あるいは他の教材や授業により補う必要があると思えます。

そして Listen to me ! ですが、こちらは事前に、本日の講師の高橋先生のご意見を頂戴してあります。それを読ませていただきますと、「リーディング力の向上に資する効果は高い。しかし、リスニング練習を中心にした教材であるのに、リスニングスコアが向上しなかったというのは不思議である。」これは本当に謎なのですが、実力テストの「リスニングテストの妥当性に問題があるのかもしれないし、」あるいは、リスニングという能力の性質上、「4ヶ月でリスニング力を飛躍的に向上させるのは難しいのかもしれない。」以上が、資料 6～8 についての説明となります。

次に資料 9 ですが、こちらは今の A.C.E. プレイスメントテストの成績と NetAcademy の学習履歴との関係をまとめてみました。NetAcademy のほうは、時間的な学習履歴を取るのは比較的簡単なので、試しにやってみた次第です。その結果ですが、残念ながら、学習時間と成績との相関関係は、あまり見られません。と言うのは、学習時間が少ないにも関わらず、高得点を取得したり、上昇幅が大きかった者がいるからです。例えば、D の学生（ただしこの学生は、リスニングは少し下降しています）や G の学生をご覧ください。その一方で、学習時間が長いにも関わらず、上昇幅が小さい者もいます。例えば、E の学生（語彙の下げ幅がとても大きい）や R の学生（ただしリーディングとリスニングは若干上昇）です。この結果につきましても、先程の熊谷先生のご意見を伺いました。それによりますと、「サンプル数が小さすぎる」可能性がある。「もしくは学習時間の幅にそれほど散らばりがなかったのか、全体として学習時間と得点向上には関係がないようだ」とのことです。むしろ、それよりは、「負の相関が散見された。」強いて言うならば、「リーディング、リスニングの学習時間とリスニングテストの得点向上にはやや相関が見られた。」つまり、「学習をたくさんすると、リスニングの得点が伸びているようだ。」とは言え、「あまり明確なことは言えない」というご意見を賜っております。以上が、効果測定についての報告でございます。

ここで、プログラムには載せてありませんが、授業期間の最後に「学生アンケート」を実施しております。それについてもご報告したいと思います。資料 10～12 をご覧ください。アンケートは選択回答と自由記述から成りますが、ここでは選択回答の分析だけを取り上げます。注意しておきたいのですが、今回の CALL 教材の学習からは必ずしも向上が期待できない能力についても、敢えて質問してみました。

最初の「リスニング力がついた」という質問に対しては、全 3 クラスでは、肯定 85%・保留 14%・否定が 2%、発展英語 2 クラスでは、肯定 85%・保留 15%・否定 0%、基礎英語では、肯定 84%・保留 11%・否定 6%となっております。

「リーディング力がついた」——こちらは、全クラスだと、肯定 50%・保留 36%・否定 14%、Listen to me ! を使いました発展英語では、肯定 39%・保留 41%・否定 19%、NetAcademy の基礎英語では、

肯定 78%・保留 22%・否定 0%です。つまり、発展英語と基礎英語との間で、大差が生じました。これは、教材の内容からして当然の結果だと思います。ただし、興味深いことに、発展英語のクラスも、本来リーディングを主眼としていない教材で学習したにも関わらず、実力テストのリーディングのスコアは上昇しております。

「スピーキング力がついた」——この質問に対しては、全クラスでは、肯定 21%・保留 44%・否定 36%、発展英語では、肯定 24%・保留 44%・否定 32%、基礎英語では、肯定 11%・保留 44%・否定 45%です。発展英語と基礎英語との間で、多少の差が生じております。つまり、発展英語のほうは若干肯定が高くて、基礎英語のほうは若干否定が高いということです。これは、高橋先生のご意見によりますと、「Listen to me!」には、スピーキング練習も（少し）あるので、『どちらとも言えない』が、『そう思わない』より多かったのではないかと考えております。

「ライティング力がついた」——この質問は、全クラスでは、肯定 21%・保留 37%・否定 42%、発展英語では、肯定 22%・保留 34%・否定 44%、基礎英語では、肯定 17%・保留 44%・否定 39%となっています。

「ボキャブラリーが増えた」——これは、全クラスでは、肯定 87%・保留 10%・否定 3%、発展英語では、肯定 86%・保留 10%・否定 5%、基礎英語では、肯定 89%・保留 11%・否定 0%です。

「文法の理解が深まった」——これは、全クラスでは、肯定 27%・保留 54%・否定 18%、発展英語では、肯定 29%・保留 56%・否定 14%、基礎英語では、肯定 22%・保留 50%・否定 28%です。

その次に3つ、「異文化理解に役立った」、「学習内容に興味を持てた」、「教材のレベルは自分に合っていた」という内容面に関する質問項目があります。これらについては簡単に述べるに留まらせていただきますが、概ね肯定的であった、と言ってよろしいかと思っております。

あと残り3つの項目ですが、分かりやすいように、質問項目を読み替えさせていただきますと、1つ目の「従来型の対面授業よりも、集中して学習できた」ということは、つまり、「対面式授業よりもCALL教材のほうが良い」ということになると思いますが、これについては、全クラスでは、肯定 69%・保留 27%・否定 4%、発展英語では、肯定 69%・保留 27%・否定 4%、基礎英語では、肯定 72%・保留 28%・否定 0%となっております。

2つ目は「対面式授業も取り入れたほうが良かった」という項目ですが、全クラスでは、肯定 30%・保留 41%・否定 29%、発展英語では、肯定 31%・保留 46%・否定 22%、基礎英語では、肯定 28%・保留 28%・否定 44%。これは、否定だと「CALL教材だけで良い」ということになりませんが、発展英語と基礎英語の間で大差が生じました。これは思うに、コースウェアとしての完成度の差によるのかな、という気がいたします。

そして最後の、「機会があれば今後もコンピューターで英語学習をしたい」、つまり「今後もCALL教材で学習したい」という質問ですが、これについては、全クラスでは、肯定 78%・保留 17%・否定 5%、発展英語では、肯定 76%・保留 16%・否定 7%、基礎英語では、肯定 84%・保留 17%・否定 0%となっております。

数字の羅列でお聞きづらかったと思いますが、以上について私なりにまとめてみますと、CALL教材というものについては、学生からは概ね肯定的評価が得られた、と言えると思っております。ただし、興味深いのですが、実際の英語力については、客観的評価、つまり先程の実力テストを使って測定した評価と、アンケートに見られる学生の主観的評価との間には、ズレがあるようです。とりわけ語彙力についての評価がズレております。学生はCALL教材で学んだことにより、ボキャブラリーが広がったと言っているのですが、それが必ずしも実力テストの成績には反映されておられません。

以上、CALL 試行授業の成果を分析してみました。私としては、CALL 教材の可能性の一端を実際に確認することができたと思っております。もちろん、調査対象となる学生数が少ないとか、学習期間が短すぎる——これは注意していただきたいのですが、あくまでも「学習期間」でありまして、必ずしも「学習時間」ではありません。「学習時間」は、ひょっとすると、従来型の授業よりも長くなっている可能性があると思います——とか、実力テストが学習者の英語力をくまなく測定できるわけではない、などといった留保条件をつける必要があるということは否定できないと思います。従って今後は、英語力測定の精度の向上を図りながら、調査対象を更に拡大し、より長期に渡る検証を行っていく必要があると思います。また、従来型の授業との比較研究も実施すべきでしょう。教室の手配が許せば、来年度、共通英語という1年次の第1学期配当の授業があるのですが、そこで従来型の授業を行ったクラスとCALL教材を使って行ったクラスに対して、同じような実力テストによる効果測定を行ってみたいと考えております。

(7) 来年度の方針・今後の展望について（平野）

まず来年度の計画についてですが、今回の試行から分かったこととして、Listen to me! は優れた教材であることは間違いないのですが、コースウェアとしての完成度が NetAcademy に比べると低いと言わざるを得ないことが挙げられます。これは裏返して言うと、活用の仕方により融通が利くという、長所にも転じうる事柄なのですが、ただ、そのようにコースウェアとしての完成度があまり高くないと、学習指導に過大な手間隙がかかる可能性があります。なぜなら、比較的完成度の高い NetAcademy にしても、先程の私の授業報告からお分かりいただけますように、教員としてやるべきことがたくさんあるのですから、Listen to me! をフルに活用するとなると、相当なエネルギーを投入しなければなりません。これは、CALL による授業を大規模に展開するということになると、大きな問題になりそうです。また学習時間の増大という、CALL 導入のそもそものきっかけとなった目的を達成するのに不可欠な、学生による自主学習が、Listen to me! では NetAcademy に比べて困難な気がいたします。

今のは内容面の問題でしたが、あと1つの問題点は、Listen to me! は、CD-ROM 型の教材でありまして、履歴をハードディスク、またはフロッピーディスクに記録するということです。これが、現在のパソコンの環境にそぐわなくなっているということがあって、それは実際、学生のほうからも、不満の声が上がっておりました。

以上のようなことに鑑み、来年度はバージョンアップした NetAcademy を使用して、それによりもたらされる、従来よりも改善された学習指導環境の下で、試行クラスも今年度より増やして、更なる検証を行う予定であります。これが、来年度の計画となっております。

次に、将来的な展望ですが、そのように十分な検証を行った上で、CALL 教材を導入すべきということになれば、その際には、次の2つの事柄に留意する必要があると考えております。

1つは、従来型の対面式授業とCALL教材による学習との2本立てでなければならぬ、ということです。以前、「英語教育改革」作業委員会から、CALL教材で本学の英語教育を全面的に置き換えるといったような印象を与えかねない報告が出て、学部の先生方から非常にお叱りを受けましたが、我々としても、決してそれはよろしいこととは考えておりません。なぜ、そのような2本立てでなければいけないかと申しますと、英語教員の数が年々減少しております。その中で全学英語教育の質的向上を要請する声に応えるという難題を解決するために、今実施されております平成17年度以降のカリキュラム

では、個々の授業の充実や独自教材の開発による教育内容の改善を図るとともに、授業コマ数を最大限にスリム化いたしました。その際には、ご存じのように、TOEIC IP を使った組織的単位認定というかなり大胆な方策を取り入れることさえ厭いませんでした。このカリキュラム改革は一定の成果を収めることができたと考えておりますが、更に教育効果を上げるためには、学生の実質的な学習時間を増大させる必要があります。そのための方策の一つとして、「英語教育改革」作業委員会では、CALL 教材が浮上してきたわけです。ですから、カリキュラムの全てを CALL で置き換えるといったことはあり得ないと考えております。

もう 1 つのポイントですが、CALL 教材を——今回は試行授業という形で、数クラスしかありませんでしたから、本日ここにいらしておられる講師の先生方や教務課の方々の個人的なご尽力でクリアできたわけなのですけれども——カリキュラム全体に導入するためには、システム管理・学習履歴の確認・教育指導といったことを一元的に行う何らかの組織が不可欠であるということです。つまり、CALL 教材は、今日ご覧になって、その一端をご理解いただけましたように、大きな可能性を秘めた教育手段ではありますが、今回の試行授業からも、また他大学等の実例からも分かりますように、1 人 1 人の学生に対応したきめ細かい学習指導なくしては、大きな効果は期待できません。CALL 教材は、一見したところのイメージに反して、すこぶる人間の手を必要とする、使いこなすのに極めて手間隙のかかる教材なのです。また、CALL 教材の性格上、個々の教員がバラバラに使用するという従来型の授業の延長線にある使い方よりは、システムメンテナンスやユーザーサポートといった純粋にテクニカルな問題のみならず、学生の学習状況を監督して指導したり、学習を行う上での相談に応じたり、定期的に効果測定を行い、その結果に応じて教材の内容の見直しを図るといった教育上の問題をも、組織的にクリアする体制を構築したほうが、はるかに効率が良いと思われるからです。

以上、来年度の方針、及び今後の展望について、お話いたしました。

(8) 質疑応答

(司会)

ありがとうございます。長い時間お聞きいただいてお疲れのことと思いますが、質疑応答に入りたいと思います。本日は学外からコメンテーターの先生といたしまして、県立新潟女子短期大学の関先生をお招きしております。ご紹介したいと思います。関先生は長年に渡って CALL 教材を用いた授業を実践しておられます。ということで、まず先生のほうから今日のFDの内容に関してコメントを頂戴したいと思います。よろしいでしょうか。

(関)

はじめまして。県立新潟女子短期大学の関と申します。よろしく申し上げます。

他の方の実践に対するコメントをさせていただくのは初めてのことなので、戸惑っております。私自身の実践も絡めながら少しだけお話しさせていただきますが、わかりにくい部分などがございましたら、どうかご遠慮なくご指摘ください。

皆さんの実践をお聞きして、まず最初に頭に思い浮かべたのは、「結局、人間はやりたい事しかできない」ということです。これはよく学生にも言うことなのですが、我々教員にも当てはまることのような気がします。先生方の中には、NetAcademy と Listen to me ! を活用した教育実践に触れ、「自分で

もやってみたい」と魅力を感じられた方もいらっしゃるれば、逆に「こんなものをして何の意味があるのか」と批判的な視点をお持ちになった方もいらっしゃると思います。CALLに魅力を感じながら意欲的に指導に活用する場合、CALLの意義を認めないまま、単に義務感に駆られて活用する場合には、当然のことながら教育効果に大きな差がでてしまいます。私自身が、これまでの経験からCALL教材を活用した英語教育についてどのような考えに至ったかと申しますと、一言で申し上げれば「ただ学生にやらせるだけでは効果は少ない、教員がCALL教育の推進に労力を厭わずに取り組んで初めて効果が発揮される」ということになります。ですから、何よりもまず、先生方がCALLに対して積極的な気持ちをお持ちになることが大変重要になると考えます。

正直に申しまして、現状では、教員の積極的な支援なしに、そのみで長期間にわたって学生の英語学習を十分に支援できるような優れたCALL教材は皆無であると言わざるを得ません。例えば、先生方の実践で紹介されたALCのNetAcademyは、私の勤務校でも積極的に活用させていただいており、学生からも大変高く評価されています。しかし、これは、教員側で、このCALL教材を教育全体にどのように取り込み、どのように支援するのか入念に検討した上で、ときに教師が積極的に介入し、またときには学生の自律性を尊重しながら注意深く活用してきた結果だと考えています。指導する教員がこの教材をよく検討せずただ学生にやらせるだけでは、効果は上がらないし、学生の英語学習意欲を維持、向上させることはできないと思います。繰り返しになりますが、先生方が労力を厭わずにCALL教材、及びCALLを活用した教育と真剣に向き合う覚悟があるか。これが最重要ポイントであろうと考えます。

次に、大学の規模の問題を指摘させていただきます。規模の大きな大学でのCALL教育と、規模の小さな大学でのCALL教育を同じ尺度で考えることはできません。私の勤務する県立新潟女子短期大学（以下、県短）は、大変規模の小さい大学です。さらに、CALLを活用した英語教育を本格的に行っているのは英文学科だけです。そして、CALL教室においてe-learning教材などを積極的に活用する英語教育は、実質的には私一人で行っています。規模の小さな集団に対して指導するメリットは、指導者側の意図を全学生に対して比較的容易に浸透させることができることです。そのため教育の効果もあがりやすい。一方、規模の大きな大学では、中心となる指導者集団の考えを個々の学生に浸透させることが容易ではありません。こちらの大学（新潟大学）もその例外ではありません。さらに、お話を伺っていると、どうやら全学的にCALLを導入されることをご検討されているようですね。

規模が大きな大学であればあるほど、同内容の講座を担当する教員数も多くなります。さらに、非常勤講師の先生方への依存率も高くなります。しかし、中心となるスタッフの考え、理念を個々の先生方に押し付けてしまい各先生方の個性を奪ってしまうことは好ましくありませんし、非常勤講師の先生方に必要以上に過度な労働を強いることもできません。この問題に対する明快な解決策などそう簡単に見出せるものではありませんが、この問題を解決できずには、規模の大きい大学において、CALLを活用して英語教育のレベルを全体的に引き上げることは困難であると思われまます。

さて、ここで、県短でALC NetAcademyを導入した経緯を少しご説明させていただきます。話は7年前にさかのぼります。すでに設置されていた旧LL教室が老朽化し、故障が相次ぐようになりました。そこで、いっそのことCALLを導入しようという気運が高まりました。また、同時期に私は英語学習に関する実態調査を全学生を対象に行いました。そこから明らかになったのは、自分の英語力に不満を抱いているにも関わらず、英語力を改善するための自発的な取り組みをしている学生が大変少ないということでした。これでは英語力を高めることができるはずがありません。私は学生に対して、当たり前のことを繰り返して伝えるようにしています。それは、「いかなる学習も自発的な取り組みがなければうまくいかない。英語学習も然り。自らやろうとする積極的な姿勢がなければ英語力を向上できるはずが

ない」ということです。少し極端な言い方をすれば、いくら教員側で多くを教えてあげようと思っても、たとえ、授業数を2つ、3つ増やしたとしても、学生本人にやる気がなければ成果は上がりません。水を飲みたくない馬に水を飲ませることはできないのです。では、どうすればいいのか、そこで考えたのが、環境の整備と動機づけの重要性です。つまり、可能な限り魅力的な学習環境を構築しつつ、学生の英語学習動機づけを高めることにより、学生の自律的な学習力を養成することを指導の主眼とすることにしました。そんな折に、学会でALC NetAcademyの教材を拝見し、「これならば学生は抵抗感なく、自主的に取り組んでくれるのではないか」と判断し導入しました。

次に、導入後の実際の指導についてお話しいたします。導入初年度は、こちらがCALLシステムやNetAcademyを含めたe-learning教材を活用した指導に不慣れだったこともあり、なかなか現在のようにはスムーズにいかず、結局、「ただやらせるだけ」のような授業になってしまいました。学生に、「これからNetAcademyを50分間やってください。」と指示し、学生は各々で学習に取り組むような授業です。教師は何をどのように指導したらいいのか分からないから教卓にじっと座って学生の姿を眺めている。そして時々机間巡視をする。そんな光景をイメージしていただければ分かり易いと思います。このタイプの授業をしばらく継続しましたが、では一体、どのような効果があったのでしょうか。その当時、英語力強化に関する効果測定を怠ってしまったので詳しくはわからないのですが、私自身の印象は、「こんな授業をするよりも、CALL機器など使わない従来の対面式の授業でいろいろと工夫した方がよほど効果的ではないか？」というものでした。今だから正直に申しますと、この段階で私のCALLへの熱意は随分と低下していました。「CALLの担当にさせられたからやるしかないけど、結局CALLは近い将来に衰退し、CALL教室は誰にも使われない寂しい部屋になるのだろうか」と考えるようになりました。

しかし、CALLに対するこのような「冷めた」考えは、後に行ったCALLに関するアンケート調査で一転しました。個々の学生が個別にe-learning教材に取り組み、教員がたまに期間巡視をして質問に答えるという、教員からすれば単調でつまらない（「楽」な？）授業に、多くの学生が、「従来の教師中心の授業よりも力がついたと感じる」、「自分のペースで進められるからよい」などと高い評価を与えたのです。これには大変驚きました。そして、このアンケート調査の結果に強く影響され、再びCALLを真剣に考え始めるようになりました。

次の段階は、CALLでの個別型学習に教員が効果的に関与する方法を考えることでした。たとえば、学生がCALLでの個別学習型の授業に好んで取り組んでいるとはいえ、教師の出番がない状態ではそれは授業と言えるかどうか疑わしいです。そのような活動は、わざわざ授業でやらなくても授業外での課題として取り組ませればよいのです。そして、試行錯誤していく中で分かってきたことは、CALLを活用して指導する際には、教員が従来とは少し異なる視点で学生と向き合わなければならないということでした。具体的には、「英語」を教えるという視点だけでなく、「英語学習の進め方」を教えるという視点で授業に向かわなければならないということが分かってきました。

先生方も実際にALC NetAcademyをお試しいただければ分かることですが、リスニング学習にしてもリーディング学習や和訳にしても、教員の支援がなくても、機械の言うままに進めていくだけで基本的な学習はすることはできます。つまり、「英語」を教えるという、従来は教員がやっていたことを、このe-learning教材がある程度は代行してくれるのです。すると、従来、「英語」だけを教えてきた教員にとっては、CALLの授業では役割が少なくなってしまう、その結果、退屈してしまうのです。しかし、英語教員には、実は、英語力を高めることと同時に英語学習力を高めるという重要な任務も課されています。英語学習力とは学習者が自らの力で英語学習を進めていく能力のことを言います。

例えば、ALC NetAcademyでは、学生が抵抗感なく取り組めるようにという意図で（さらにコンピュ

ーターが得意ではない教員でも扱えるように)、構成は学習効果を損ねない程度にわざと単純なものとなっています。構成が単純であるということは、即ち飽きやすいという欠陥を備えています。最初はすごくおもしろがって取り組んでも、5回、6回と同じ単純な手順で学んでいるうちに、次第にあくびを繰り返すようになる学生も少なくありません。しかし、これは、学生がコンピューターの「手下」となって、コンピューターの単純な指示に機械的に従って学習しているから飽きてくるのですね。そうではなく、指示が単純であろうとも、英語力を高めたいという強い気持ちで、1つ1つの活動に取り組むことによって期待できる学習効果をしっかり理解した上で自発的に取り組めば、全く違う意識で取り組むことができます。しかし、このようなことはコンピューターやe-learning教材は決して教えてくれないので、教員が確実に指導しなければならない部分です。そして、この部分の指導は実は大変な労力と高い指導技術を必要とします。

先程のお話の中で少し気になったことがあります。それは「CALLで授業の効率化をはかる」とか「CALL導入によって少ない授業で成果を上げる」というご意見についてです。率直に私の意見を申し上げると、「CALLを使うと効率的に学生の英語力が上がる」、「CALLがあれば、授業数が少なくなっても、教員数が減っても何とかなる」というのは少し強引すぎる発想ではないかと思います。CALLを使うと学生の学習の質を高めることができることは確かだとは思いますが、CALLを効果的に活用するためには、先にも申しましたが、指導者側の相当の労力が必要となります。ですから、教員数を減らすどころか、逆に増やす努力が必要になると思います。

それから、環境についてです。CALLは、すきな時間に、すきな教材を使って、自分のペースで学習できることが強みです。ですから、例えば授業の時だけCALL教室を使って、それ以外の時間は施錠してしまう。これだと意味がないのです。授業内のみでのCALLというのは、CALLの基本的なコンセプトに反します。

また、先程CDが使えないとか、フロッピーは時代遅れだなどのご意見がありましたが、このような問題も真剣に考えていかなければなりません。県短のCALLでは個々の学生ブースにMDプレーヤーを取り付けました。学生は必要に応じて教材をMDに録音して自宅に持ち帰って学習しています。数年前まではこれで十分だったのですが、ここ数年で「MDプレーヤーを持っていないから、教材を持ち帰れません」と訴えてくる学生が随分と増えました。なぜならば、i-podやMP3プレーヤーなどが主流になってきたからです。MDプレーヤーを所持していない学生には「では、MDプレーヤーを購入しなさい」と去年までは指導しました。しかし今年はさすがに言えなくなりました。つまり、CALLをさらに有効利用するためには、環境面でも、常に最新のものに対応するという意識が必要となります。

最後に、CALLとTOEICのスコアや試験のスコアとの関連についてです。先程、NetAcademyやListen to me!を使って実力テストのスコアが向上したというご指摘がありましたが、率直な疑問は、「では、普通の対面式の授業をやっていると、どうなのか?」ということです。スコアが上がったのはCALLのおかげなのか、それとも、教師の指導技術の賜物なのか、もしくは単に学生が一生懸命勉強した結果なのかを知りたくなりました。つまり、今後はCALLの学習効果に関する基礎的なデータを着実に積み重ねていくことが大切であろうと感じました。

私は新潟大学の出身で、新潟大学で受けた高いレベルの教育に大変誇りを持ちながら現在の生活を送っています。そして、新潟大学の外国語教育のさらなる発展を強く願っております。先生方の熱心な取り組みが実を結び、他大学では類を見ないような高い成果を上げられることを心から期待しています。以上です。ありがとうございました。

(司会)

所属と名前をお願いします。

(質問者)

経済学部鈴木と言います。まず第一に、NetAcademy というものを紹介されましたが、できの良さに感心しました。これで僕は自分を鍛えようと思いました。それで、これを本気で十分に活用すれば、つまり 1 日最低 1 時間・継続最低 3 年ですが、相当な効果が上がると思います。それくらいのことができなくて言葉なんか身につかないというのが僕の信念です。それから、問題はこれをアナログ教材と如何に調和させるかという部分だと思うのです。というのは、これでやったらリスニングとファストリーディング(速読)でかなりの成果が上がると思うのです。でも、僕はこれでは語彙力や文法力はどこまでつくのか疑問だと思っているのです。というのは、語彙力は、要するにアナログ的といいますか、何回も何回も辞書を引いての結果です。さっき、僕が非常に気になったのは高橋先生が「辞書を引く必要は、ほとんどありません」と言ったことです。これはどうなのだろうと思いました。要するに、単語は面倒なことをやるから身につくのです。職人さんがああやって鍛えてすごい技がつくのは、本当に基礎的なことを何度も何度もやるからだ僕は思っています。そうすると、NetAcademy はすごく良くできているけれども、それを如何に「紙の辞書」を引くことと調和させられるかということが 1 つの問題ではないかと思えます。それを教えていただけたら僕は自分で購入してもいいくらいです。

それから、調査の結果で面白いと思ったのですが、Listen to Me! でリスニングが上がらないというのは本当に不思議です。リスニングが上がらなければおかしいですね? 僕は 2~3 年前に「集中コース」というものをやったのですが、TOEIC でいうと 150 点くらいあがりました。リスニングはそんなに難しいことじゃないですよ、集中的にやると。実際にもし必要ならお見せしますけれど、統計を取りましたから。でも、リスニングで上がらない。で、語彙力も上がらない。そのあたりで、もしもこれでやってリスニングが上がらないのならどうするのだろうという気がします。リーディングは、そんなになかなか上がるものじゃない。さっきのファストリーディングは、また別ですけども。

最後に、これを導入するなら、先程指摘があったこれを専門にやる人、人材を確保しなくてはならないと思えます。僕らみたいな昔の古いアナログの人間がそれをできるわけないですし大変ですから、是非、そういう人材を入れていただいて、例えばコンピューター助手とか何々室担当の人間というように、そういう方法がない限り、かえって逆効果じゃないかなというような気がします。最後の部分は是非、河野先生お願いいたします。

(平野)

先程も申しましたけれど、語彙や文法的な理解もおそらくそうでしょうが、あとクローズリーディング(精読)ですね、CALL 教材だけだと不十分だと思われるのは。先程ご説明した実力テストや、TOEIC もそうだと思うのですが、あれらのリーディングセクションで主に要求されるのは、どちらかと言うとファストリーディングの能力ですね。一方、グラマーのセクションについては、クローズリーディングにつながるような、文法理解の力が絶対に必要です。今回の報告では割愛したのですが、学生へのアンケートでは自由記述回答もしてもらいました。その中で、対面式授業も入れたほうがいいと言う学生が、比較的少数ながら、おりました。その理由は何かと言いますと、やはり文法ですね。そのへんの力が、どうしても CALL 教材では付きにくいのではないかと、学生自身も感じていたようです。「どこが学習のツボなのか?」という、その「ツボ」を、教員に教えてもらいたいというわけで、そのあた

りが、今の鈴木先生のお言葉を借りると、アナログなスタイルの授業が積極的に関わっていくべきところなのではないか、と私は考えております。

(門倉)

開発会社からということで1点だけ。やはり「アナログ教材と如何に関連していくか?」、「実際にどうやって運用するか?」ということは、多くの学校様で悩んでおられるところです。NetAcademyだけを90分黙々とやらせて、これをメイン教材にしている学校は、最近ではやはり少なくなってきております。理由としましては、今先生方からお話があったように、文法の考え方、文法のレッスンをさせる、単語のフォローアップをしていく、という、先生にしかできないことをやはり授業ではやらなくてはいけないということで、90分の授業のうち、例えば半分をパソコン、半分を対面。もしくは、完全に授業外の指定教材として使わせる。つまり成績にもしつかり組み込むということですが、そのようにして、ある程度、強制力・義務感をもって使わせるなど、アナログ教材とデジタル教材を併用し、先生と学生さんとがグループになって使うというのが、最近のNetAcademyの使い方だと思います。

(司会)

ありがとうございました。2点目のリスニング力につきまして、Listen to Me! で実践していただいた高橋先生、ハドリー先生は非常に熱心に授業をされておりまして、それにも関わらず顕著な上昇がないということについては、我々もどうということだろうか?と、今のところ答えがない状況ですが、関先生、何かご意見があれば、お願いします。

(関)

県立新潟女子短大ではTOEICを6年間やっています。TOEICの対策として、最初の頃は英語の4技能を満遍なく指導していましたが、学生のTOEICスコアのある特徴を発見してからは、初・中級の学生にはまず、リーディングセクションに集中させることにしました。その特徴とは、詳しくは述べる時間はありませんが、簡潔に申し上げれば、リーディングのスコアが250点くらいないと、基本的なリスニングにも支障をきたしてしまうということです。そして、例えば、リーディングのスコアが170点の学生が250点に伸ばすためには、中学・高校レベルの単語や文法のおさらいをするなどの基礎的、かつ地道な努力をするしかないのだと思います。リスニングが弱いからたくさん聞けばよい、というだけでなく、学生のいやがりがちで、コツコツと1つずつ知識を積み重ねる学習もとても重要になると思います。

(司会)

それでは、鈴木先生の発言の3点目について河野先生、お願いします。

(河野)

鈴木先生から発言を求められましたのでお話しいたします。「英語教育改革」作業委員会でも随分議論がありました。論点は主に2つありました。

1つは、先生がおっしゃられたように、「CALL教材をどうやって使うか?」です。うまく使える人が要る、トレーニングすればいいのかもしれない。鈴木先生はできないとおっしゃるが、ちょっとトレーニングすれば、すごくうまくできるかもしれない。それは、まだやったことがないからわからないだけ

で。もう1つは、全体をCALL教材でやるわけではなく、今も出てきたようにアナログと一緒にやる。新潟大学の英語をどのようなシステムで、どうやって教えるのか？ 先程関先生がおっしゃられたように、すごく大きな新潟大学だから、その英語教育全体をマネジメントする人が要るのではないかと私は思うのです。マネジメントする人も要れば、教える人も要る。その必要は、我々大学の執行部の人間が「要る」と言ってもダメなので、先生方が「欲しい」と言わなければ、何もならない。どういう人が欲しいのですか？ 何のために？ まずそういうムーブメントを高めて欲しい、というふうに思うわけです。

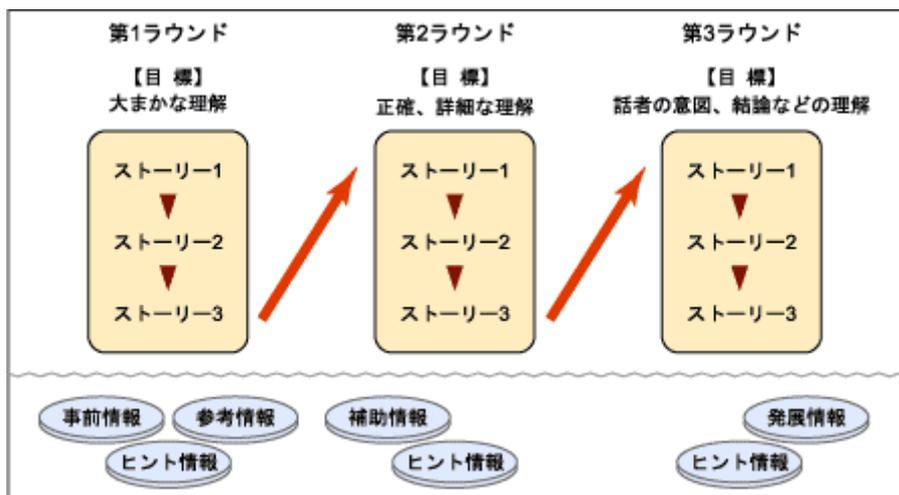
この委員会は、ここまできた。CALLのようなものも有効であると分かった。そこで「この先、どうやろうか？」ということを考えなければならないので、是非、先生方のご意見をいただきたい。私が大学の理事として、「そういうものが必要で、教員を1人つけましょう」と言っても、先生方と一緒にうまくやっていけるかどうか分からない。だから、まず英語の先生方全体が、「どういう人が、どういう部署に要るんだ」ということを認識なさる——それが最初だと思っています。大学全体として必要だということであれば、そこに人が回せないということはないと思います。それは先生方の熱意と私と濱口先生の熱意で実現できることだと思います。

(9) 閉会の言葉 (司会)

ありがとうございました。15分も時間が過ぎましたので、このあたりで閉会させていただきたいと思います。司会進行の不手際で時間オーバーしてしまいまして、申し訳ありませんでした。講師の先生方、アルク教育社の門倉様、それから、関先生、今日は本当にありがとうございました。また、ご参加くださいました皆様、寒い中、足元が悪い中、この時間を割いていただきまして、本当にありがとうございました。アンケートがございますので、今書かれなくても、後日1週間程度見ていただければよいかと思いますが、是非とも送付いただきたいと思います。それを参考にしまして、これから英語教育改革に更には、努力を傾けていきたいと考えております。本日はどうもありがとうございました。

1. Listen to Me! 概要

Listen to Me! シリーズは、竹蓋幸生千葉大学名誉教授を中心とするプロジェクトチームによって作成された大学生用英語教育 CD-ROM 教材である。実際のコミュニケーションに要求される英語力を日本の大学生に習得させることを目標とし、そのために必要となる難しい素材をいかに理解させ学習事項を定着させるかについて研究が行われた結果、「3 ラウンド・システム」が構築された。その骨格は次の図のとおりである。



3 ラウンド・システムの「骨格」と各種情報を与えるタイミング

(<http://www5e.biglobe.ne.jp/%7Etakefuta/3step/sots.html>)

このシステムでは、同じ素材（例えば上記の図のストーリー1）を3回（第1ラウンド～第3ラウンド）に分けて学習する。各ラウンドで異なる学習目標を設定しており、ラウンドが進むごとに徐々にその素材の理解が深まるようになっている。こうすることで、各ラウンドの学習作業（タスク）に相互関係を持たせることが可能になり、各ラウンドの学習時に感じる難易度を格段に下げることが可能になる。また、一つの素材を連続的にではなく、他の素材の学習をはさんで断続的に行うことにより分散学習の効果が期待でき、学習結果の定着が強まる。

2. Listen to Me! 初級

初級用教材 First Listening は、TOEIC300～400 レベルの大学生のコミュニケーション能力を養成するために制作された。内容は「いろいろな場面での対話」「各種メッセージ」「自動車の話」「世界を学ぶ」など、バラエティに富んだ素材を使用している。はじめのうちはごく短い簡単な会話やパッセージを素材にしており、スピードも遅いので新潟大学の学生

には物足りなく感じられるかもしれない。しかし、学習を進めていくうちに徐々に長く難しい素材になっていく。最終ユニットで扱う素材は、かなり長くスピードも速くなっている。全体としては、大学生の知的好奇心を刺激する内容とは言い難いのであるが、扱っている英語レベル（初級）を考えると、仕方がないのかもしれない。

3. Listen to Me! 初中級

初中級用教材 **Introduction to College Life** は、カリフォルニア大学バークレー校の教職員や学生に対するインタビューを素材とするもので、中上級用教材 **College Life** の入門編である。入門編とはいえ音声はナチュラルスピードであり、映像も伴って臨場感あふれる教材となっている。インタビューの内容は、講義の概要やキャンパス情報、学生の日常生活についてなど、いずれも学生には身近なものであり、大学生として習得してもらいたいコミュニケーション能力のレベルであると思われる。

授業の具体的な内容

授業科目名：G0108 発展英語（90分×15回）

聴講生：工学部 2年 23名、昨年度 TOEIC470 未満

教室：総合教育研究棟 第1マルチメディア教室

教材：Listen to Me! 初級用 CD-ROM（First Listening）を学生に貸与

評価方法：平常 50%、学期末テスト（ELPAA.C.E.プレイズメント・テスト）50%

まず、1回の授業の流れを示す。2週に一度の小テストを実施する日は、

- ① 小テスト、②ディクテーション（聞き取りテスト）、③前週のディクテーションの答え合わせ、④各自が CD-ROM を使って学習。

という流れで授業を行った。①から③まで約 35 分かかった。

小テストを実施しない日は、

- ① 前週の小テストの答え合わせ、②ディクテーション、③前週のディクテーションの答え合わせ、④各自が CD-ROM を使って学習。

という流れだった。①から③まで、やはりおよそ 35 分かかった。

次に、具体的な授業内容を説明する。学生が教材 **First Listening** の学習を進めていくための目安として、2 週間に一度の小テスト（15 分程度）を設定した。進度の目安は、小テスト実施までにテスト範囲の学習を終えるという形をとった。ただし、指定された範囲より先に進まないように、という指導はしなかった。**First Listening** は易しい教材のため、学生によっては指定された学習範囲だけでは物足りないと感じる人もいると思い、やる気のある学生は自分のペースで学習を進めていく方が良く考えたからである。小テストの成績は、毎回ほぼ満点（20 点）に近い学生から、25%ほどしかできない学生と様々であった。小テストは翌週返却し、クラス全体で答え合わせを行った。

ディクテーション（10 分程度）は毎週行った。**First Listening** を利用したディクテーションを行いたかったのだが、CD-ROM の音声を一斉に聞かせる機能がなかったので、別の教材を利用して作成した。このテストはリスニング練習をするための励みになっていたようである。ディクテーションの成績は、満点（10 点）近くを取る学生も、半分しかできない学生もいた。翌週返却し、クラス全体で答え合わせを行った。

教材 **First Listening** の学習については、最初のうち、コンピュータの音量調節ができないことなどあったが、CD-ROM の使い勝手は良かったようである。ただ、長時間コンピュータに向かい、ひとり黙々と学習を進めるので、眠くなる学生が複数いた。教材の内容についての質問はほとんどなかった。学習記録を保存するため、フロッピーディスクを毎週持参するよう指示したが、自宅に忘れてくる学生もおり、手書きの学習記録用紙も併用させた。CD-ROM を忘れてくる学生もいた。そのような学生には、ネットアカデミーを学習させた。教室外でも学習することを指導したが、それが難しい場合もあったようである。

自宅のコンピュータにフロッピーディスクドライブがないことや、工学部のコンピュータにフロッピーディスクや CD-ROM が入らないということがその理由だった。最終授業日にフロッピーディスクおよび手書きの学習履歴を提出させた。

成績評価は、平常点を 50%、学期末テストを 50%とした。平常点は、小テスト、ディクテーション、教材の学習状況、出席を評価した。学期末テストとして、英語運用能力評価協会 (ELPA) の A.C.E.プレイズメント・テストを利用した。

授業の具体的な内容

授業科目名：G0111 発展英語（90分×15回、ただし登録・テスト期間を除くと実質10回）

聴講生：工学部2年19名、昨年度受験TOEIC470未満

教室：総合教育研究棟 第2マルチメディア教室

教材：Listen to Me! 初中級用CD-ROMを学生に貸与

評価：平常50%、学期末テスト（ELPA ACE プレースメント・テスト）50%

毎回学習箇所を指定し、授業時間中に終えられなかった分は宿題として自宅（聴講生のほとんどがパソコン所有）や自習室で学習させた。授業開始時に前回の学習内容に関する小テストを行った。1ラウンド目は英日単語テスト、2ラウンド目は部分ディクテーション、3ラウンド目は日英単語テストと音読テストを行った。3ラウンド目には、個別の学習相談・指導も行う予定であったが、時間の関係で1回しか行えなかった。当初はクラス全体でのコミュニケーション活動も計画していたが、全員一斉に音声を聞かせる機能とスクリプトをプリント・アウトする機能がなかったこと、および学生がそれぞれ自分のペースで進めている学習を中断したくなかったことから、今回は実施しないことにした。このため長時間にわたるコンピュータ学習となったので、授業時間中に各自10分間、休憩のために退室を許可した。利用者は7割程度であった。質問は随時受け付けるようにしていたが、こちらから聞き出さない限り質問はほとんどなかった。授業中はひとりを除き全員、程度の差はあれ集中して学習している様子であった。学期末には、学習履歴が記録されているフロッピーディスクを提出させた。しかし、操作がうまくいかずに手書きの学習履歴を提出した学生もあり、記録の正確さは定かではない。

成績評価は、平常点を50%、学期末テストを50%とした。平常点は小テストと出席・学習状況を中心とした。学期末テストは、英語運用能力評価協会（ELPA）のACE プレースメント・テストを利用し、語彙、文法、リーディング、リスニングの力を測定した。

授業の具体的な内容

授業科目名：G0064 基礎英語（90分×14回〔休講1回〕）

聴講生：18名（内訳：人文学部4年1名、教育人間科学部2年4名、経済学部2年1名、同4年1名、理学部3年1名、医学部保健学科2年1名、工学部2年4名、同3年3名、農学部3年2名）— 昨年度基礎英語を不合格もしくは未履修の者

教室：総合教育研究棟 第3マルチメディア教室

教材：ALC NetAcademy スタンダードコース

*教材の概要については <http://www.alc.co.jp/netacademy/standard/index.html> もしくは配付フライヤーを参照

評価方法：平常50%、第2回実力テスト（ELPA A.C.E.プレイスメント・テスト）50%

〔授業計画〕

第1回（4/14）：聴講登録・ガイダンス

第2回（4/21）：レベル診断テスト — 以後 NetAcademy による学習が可能

第3回（4/28）：第1回実力テスト（有料〔945円〕）

第4-12回（5/12-7/14）：NetAcademy による学習

第13回（7/21）：NetAcademy による学習、レベル診断テスト（再）、授業アンケート

第14回（7/28）：第2回実力テスト（有料〔945円〕）

*課外学習（自習）期限：8月4日午後5時

〔学習の具体的方法〕

☆ 授業（第4-13回）

- （1）着席後すみやかに、各自PCを立ち上げ、NetAcademy にログインさせる。
- （2）リスニング力強化コースおよびリーディング力強化コースの教材（5段階の難易度のうちレベル3のもの）を1ユニットずつ指定し、各自学習させる（～15:30頃〔約50分〕）— この間に教員が巡回し、個別に出席調査、学習進捗の確認、指導、相談を行なった。
- （3）指定した TOEIC テスト演習を各自解答させる（15:35頃～〔約35分〕）。

☆ 課外学習（自習）

レベル診断テストにより推奨されたレベルの教材を中心に、できるだけ多くのユニットを学習させる。

CALL 教材は学内でのみ利用可能⁽¹⁾なので、総合情報処理センター、IT自習室などに設置された端末⁽²⁾や、学内 LAN に接続した個人のパソコンから、

<http://call.ge.niigata-u.ac.jp/n-acad/bin/le/wletop.asp>

にアクセスさせた。

- ① 授業期間の途中で VPN によるアクセスが可能なが判明。
 ② 学内端末にはヘッドフォンが備え付けておらず、持参するよう注意したにもかかわらず忘れてリスニングの学習に支障が生じた者が散見された。

〔成績評価の方法と基準〕

NetAcademy の学習状況 (50%) および第 2 回実力テスト (英語運用能力評価協会 (ELPA) の A.C.E.プレイズメント・テストを利用) の成績 (50%) により評価した。

前者については、リスニング、リーディング教材ともに 1 ユニットあたり 15 分以上かけて 30 ユニット (60%) 以上、および TOEIC テスト演習全 10 回を、期限 (8 月 4 日午後 5 時) までに学習することを満点の条件とした。

(参考) 標準学習進捗率

4/21(2)	4/28(3)	5/5	5/12(4)	5/19(5)	5/26(6)	6/2(7)	6/9(8)
0%	4%	8%	12%	16%	20%	24%	28%
6/16(9)	6/23(10)	6/30(11)	7/7(12)	7/14(13)	7/21(14)	7/28(15)	8/4
32%	36%	40%	44%	48%	52%	56%	60%

2順位	T2(300)	T1(300)	T2-T1	V2(50)	V1(50)	V2-V1	G2(50)	G1(50)	G2-G1	R2(100)	R1(100)	R2-R1	L2(100)	L1(100)	L2-L1
1	247	193	54	39	33	6	39	25	14	98	71	27	71	64	7
2	242	185	57	29	31	-2	27	29	-2	88	61	27	98	64	34
3	241	221	20	29	44	-15	27	25	2	97	88	9	88	64	24
4	241	191	50	44	31	13	31	29	2	88	61	27	78	70	8
5	236	185	51	34	33	1	36	31	5	88	57	31	78	64	14
6	236	197	39	49	36	13	49	36	13	78	71	7	60	54	6
7	235	196	39	36	31	5	31	27	4	97	61	36	71	77	-6
8	230	197	33	36	40	-4	36	27	9	98	71	27	60	59	1
9	229	218	11	49	40	9	49	31	18	71	88	-17	60	59	1
10	228	186	42	44	44	0	36	31	5	88	57	31	60	54	6
11	226	185	41	39	44	-5	49	31	18	78	65	13	60	45	15
12	223	191	32	49	33	16	36	29	7	78	65	13	60	64	-4
13	222	193	29	36	36	0	33	31	2	88	57	31	65	69	-4
14	221	223	-2	49	40	9	39	31	8	78	88	-10	55	64	-9
15	219	202	17	44	31	13	33	44	-11	71	57	14	71	70	1
16	219	190	29	49	39	10	33	39	-6	66	53	13	71	59	12
17	216	172	44	39	39	0	49	33	16	78	46	32	50	54	-4
18	213	188	25	39	36	3	26	25	1	88	50	38	60	77	-17
19	212	181	31	39	33	6	39	29	10	88	65	23	46	54	-8
20	211	205	6	29	39	-10	39	36	3	77	71	6	66	59	7
21	211	195	16	49	36	13	31	25	6	71	57	14	60	77	-17
22	211	194	17	44	39	5	39	31	8	78	65	13	50	59	-9
23	210	149	61	31	28	3	31	27	4	77	53	24	71	41	30
24	209	128	81	31	17	14	29	18	11	71	43	28	78	50	28
25	209	192	17	39	39	0	44	33	11	71	70	1	55	50	5
26	207	187	20	36	39	-3	36	39	-3	57	50	7	78	59	19
27	206	205	1	36	45	-9	44	31	13	71	65	6	55	64	-9
28	206	194	12	39	44	-5	36	31	5	66	65	1	65	54	11
29	206	206	0	36	39	-3	44	29	15	71	61	10	55	77	-22
30	205	208	-3	29	44	-15	33	29	4	77	71	6	66	64	2
31	203	186	17	36	33	3	29	31	-2	78	53	25	60	69	-9
32	201	217	-16	31	49	-18	27	33	-6	77	71	6	66	64	2
33	201	181	20	25	31	-6	27	29	-2	61	57	4	88	64	24
34	201	155	46	44	28	16	31	27	4	71	50	21	55	50	5
35	199	172	27	34	36	-2	27	25	2	77	61	16	61	50	11

36	198	160	38	27	31	-4	22	29	-7	71	46	25	78	54	24
37	198	164	34	39	26	13	33	36	-3	66	61	5	60	41	19
38	197	187	10	36	36	0	39	27	12	71	65	6	51	59	-8
39	196	181	15	36	33	3	36	25	11	78	46	32	46	77	-31
40	193	165	28	39	40	-1	33	27	6	66	57	9	55	41	14
41	192	193	-1	33	36	-3	33	36	-3	71	57	14	55	64	-9
42	191	173	18	31	28	3	31	33	-2	78	53	25	51	59	-8
43	191	156	35	44	33	11	26	23	3	61	46	15	60	54	6
44	190	169	21	26	28	-2	22	21	1	71	50	21	71	70	1
45	189	176	13	33	45	-12	39	27	12	66	50	16	51	54	-3
46	188	164	24	27	26	1	24	27	-3	66	61	5	71	50	21
47	186	149	37	25	26	-1	17	25	-8	66	39	27	78	59	19
48	181	163	18	33	31	2	36	29	7	66	53	13	46	50	-4
49	179	151	28	27	26	1	27	21	6	54	50	4	71	54	17
50	177	149	28	20	31	-11	24	21	3	77	43	34	56	54	2
51	177	144	33	39	26	13	26	27	-1	66	46	20	46	45	1
52	170	141	29	33	24	9	29	21	8	53	46	7	55	50	5
53	162	149	13	27	28	-1	22	23	-1	57	39	18	56	59	-3
54	160	163	-3	36	28	8	29	33	-4	49	43	6	46	59	-13
55	150	160	-10	31	28	3	22	25	-3	46	43	3	51	64	-13
56	137	140	-3	15	24	-9	15	23	-8	61	43	18	46	50	-4
57	132	134	-2	20	28	-8	20	27	-7	50	43	7	42	36	6
平均	203	179	24	35	34	1	32	29	4	73	57	16	62	59	3

〔凡例〕

T:合計得点 V:語彙得点 G:文法得点 R:リーディング L:リスニング
 2:第2回(7月25日実施) 1:第1回(4月25日実施)

2順位	T2(300)	T1(300)	T2-T1	V2(50)	V1(50)	V2-V1	G2(50)	G1(50)	G2-G1	R2(100)	R1(100)	R2-R1	L2(100)	L1(100)	L2-L1
1	247	193	54	39	33	6	39	25	14	98	71	27	71	64	7
2	241	191	50	44	31	13	31	29	2	88	61	27	78	70	8
3	236	197	39	49	36	13	49	36	13	78	71	7	60	54	6
4	230	197	33	36	40	-4	36	27	9	98	71	27	60	59	1
5	229	218	11	49	40	9	49	31	18	71	88	-17	60	59	1
6	228	186	42	44	44	0	36	31	5	88	57	31	60	54	6
7	226	185	41	39	44	-5	49	31	18	78	65	13	60	45	15
8	223	191	32	49	33	16	36	29	7	78	65	13	60	64	-4
9	222	193	29	36	36	0	33	31	2	88	57	31	65	69	-4
10	221	223	-2	49	40	9	39	31	8	78	88	-10	55	64	-9
11	219	202	17	44	31	13	33	44	-11	71	57	14	71	70	1
12	219	190	29	49	39	10	33	39	-6	66	53	13	71	59	12
13	216	172	44	39	39	0	49	33	16	78	46	32	50	54	-4
14	213	188	25	39	36	3	26	25	1	88	50	38	60	77	-17
15	212	181	31	39	33	6	39	29	10	88	65	23	46	54	-8
16	211	195	16	49	36	13	31	25	6	71	57	14	60	77	-17
17	211	194	17	44	39	5	39	31	8	78	65	13	50	59	-9
18	209	192	17	39	39	0	44	33	11	71	70	1	55	50	5
19	207	187	20	36	39	-3	36	39	-3	57	50	7	78	59	19
20	206	205	1	36	45	-9	44	31	13	71	65	6	55	64	-9
21	206	194	12	39	44	-5	36	31	5	66	65	1	65	54	11
22	206	206	0	36	39	-3	44	29	15	71	61	10	55	77	-22
23	203	186	17	36	33	3	29	31	-2	78	53	25	60	69	-9
24	201	155	46	44	28	16	31	27	4	71	50	21	55	50	5
25	198	164	34	39	26	13	33	36	-3	66	61	5	60	41	19
26	197	187	10	36	36	0	39	27	12	71	65	6	51	59	-8
27	196	181	15	36	33	3	36	25	11	78	46	32	46	77	-31
28	193	165	28	39	40	-1	33	27	6	66	57	9	55	41	14
29	192	193	-1	33	36	-3	33	36	-3	71	57	14	55	64	-9
30	191	173	18	31	28	3	31	33	-2	78	53	25	51	59	-8
31	191	156	35	44	33	11	26	23	3	61	46	15	60	54	6
32	190	169	21	26	28	-2	22	21	1	71	50	21	71	70	1
33	189	176	13	33	45	-12	39	27	12	66	50	16	51	54	-3
34	181	163	18	33	31	2	36	29	7	66	53	13	46	50	-4
35	177	144	33	39	26	13	26	27	-1	66	46	20	46	45	1

A.C.E.プレイスメント・テスト成績比較

資料 7

36	170	141	29	33	24	9	29	21	8	53	46	7	55	50	5
37	160	163	-3	36	28	8	29	33	-4	49	43	6	46	59	-13
38	150	160	-10	31	28	3	22	25	-3	46	43	3	51	64	-13
39	137	140	-3	15	24	-9	15	23	-8	61	43	18	46	50	-4
平均	204	182	22	39	35	4	35	30	5	73	58	15	58	59	-2

[凡例]

T: 合計得点 V: 語彙得点 G: 文法得点 R: リーディング L: リスニング
 2: 第2回(7月25日実施) 1: 第1回(4月25日実施)

2順位	T2(300)	T1(300)	T2-T1	V2(50)	V1(50)	V2-V1	G2(50)	G1(50)	G2-G1	R2(100)	R1(100)	R2-R1	L2(100)	L1(100)	L2-L1
1	242	185	57	29	31	-2	27	29	-2	88	61	27	98	64	34
2	241	221	20	29	44	-15	27	25	2	97	88	9	88	64	24
3	236	185	51	34	33	1	36	31	5	88	57	31	78	64	14
4	235	196	39	36	31	5	31	27	4	97	61	36	71	77	-6
5	211	205	6	29	39	-10	39	36	3	77	71	6	66	59	7
6	210	149	61	31	28	3	31	27	4	77	53	24	71	41	30
7	209	128	81	31	17	14	29	18	11	71	43	28	78	50	28
8	205	208	-3	29	44	-15	33	29	4	77	71	6	66	64	2
9	201	217	-16	31	49	-18	27	33	-6	77	71	6	66	64	2
10	201	181	20	25	31	-6	27	29	-2	61	57	4	88	64	24
11	199	172	27	34	36	-2	27	25	2	77	61	16	61	50	11
12	198	160	38	27	31	-4	22	29	-7	71	46	25	78	54	24
13	188	164	24	27	26	1	24	27	-3	66	61	5	71	50	21
14	186	149	37	25	26	-1	17	25	-8	66	39	27	78	59	19
15	179	151	28	27	26	1	27	21	6	54	50	4	71	54	17
16	177	149	28	20	31	-11	24	21	3	77	43	34	56	54	2
17	162	149	13	27	28	-1	22	23	-1	57	39	18	56	59	-3
18	132	134	-2	20	28	-8	20	27	-7	50	43	7	42	36	6
平均	201	172	28	28	32	-4	27	27	0	74	56	17	71	57	14

〔凡例〕

T:合計得点 V:語彙得点 G:文法得点 R:リーディング L:リスニング
 2:第2回(7月28日実施) 1:第1回(4月28日実施)

氏名	T2	T1	T2-T1	V2	V1	V2-V1	G2	G1	G2-G1	R2	R1	R2-R1	L2	L1	L2-L1	N	RH	RU	RH/RU	LH	LU	LH/LU	TH
G	209	128	81	31	17	14	29	18	11	71	43	28	78	50	28	7	446	31	14	427	30	14	873
F	210	149	61	31	28	3	31	27	4	77	53	24	71	41	30	6	629	30	21	652	30	22	1281
A	242	185	57	29	31	-2	27	29	-2	88	61	27	98	64	34	1	448	28	16	484	25	19	932
C	236	185	51	34	33	1	36	31	5	88	57	31	78	64	14	3	585	30	20	683	31	22	1268
D	235	196	39	36	31	5	31	27	4	97	61	36	71	77	-6	4	165	31	5	274	31	9	439
L	198	160	38	27	31	-4	22	29	-7	71	46	25	78	54	24	12	575	30	19	556	31	18	1131
N	186	149	37	25	26	-1	17	25	-8	66	39	27	78	59	19	14	539	30	18	547	30	18	1086
O	179	151	28	27	26	1	27	21	6	54	50	4	71	54	17	15	406	34	12	417	30	14	823
P	177	149	28	20	31	-11	24	21	3	77	43	34	56	54	2	16	227	30	8	336	30	11	563
K	199	172	27	34	36	-2	27	25	2	77	61	16	61	50	11	11	666	31	21	640	30	21	1306
M	188	164	24	27	26	1	24	27	-3	66	61	5	71	50	21	13	594	30	20	613	30	20	1207
B	241	221	20	29	44	-15	27	25	2	97	88	9	88	64	24	2	480	30	16	521	30	17	1001
J	201	181	20	25	31	-6	27	29	-2	61	57	4	88	64	24	9	594	30	20	441	30	15	1035
Q	162	149	13	27	28	-1	22	23	-1	57	39	18	56	59	-3	17	412	30	14	427	30	14	839
E	211	205	6	29	39	-10	39	36	3	77	71	6	66	59	7	5	688	30	23	726	30	24	1414
R	132	134	-2	20	28	-8	20	27	-7	50	43	7	42	36	6	18	603	30	20	505	30	17	1108
H	205	208	-3	29	44	-15	33	29	4	77	71	6	66	64	2	8	498	30	17	577	31	19	1075
I	201	217	-16	31	49	-18	27	33	-6	77	71	6	66	64	2	9	460	30	15	615	30	21	1075
平均	201	172	28	28	32	-4	27	27	0	74	56	17	71	57	14		501		17	525		18	1025

〔凡例〕

A.C.E.プレイスメント・テスト

T: 合計得点 V: 語彙得点 G: 文法得点 R: リーディング L: リスニング N: 順位
 2: 第2回(7月28日実施) 1: 第1回(4月28日実施)

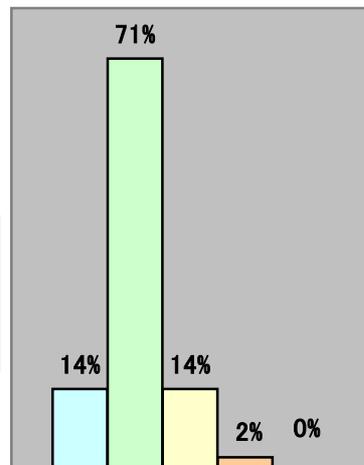
ALC NetAcademy

RH: リーディング学習時間(分) RU: リーディング学習ユニット数 LH: リスニング学習時間(分) LU: リスニング学習ユニット数
 TH: 合計学習時間(分)

平成18年度第1学期 CALL試行授業3クラス 59名

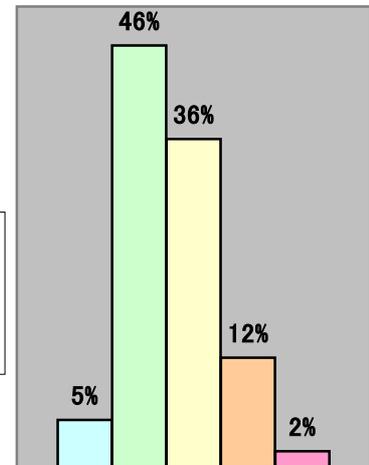
1.リスニング力が上がった

- 非常についた
- 多少ついた
- どちらとも言えない
- あまりつかなかった
- 全くつかなかった



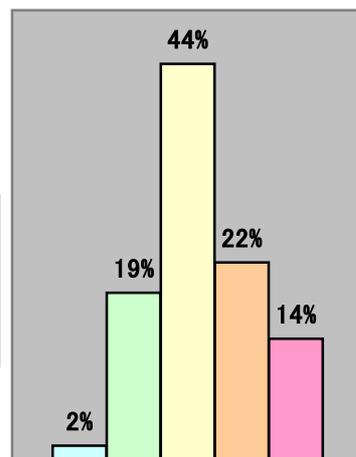
2.リーディング力が上がった

- 非常についた
- 多少ついた
- どちらとも言えない
- あまりつかなかった
- 全くつかなかった



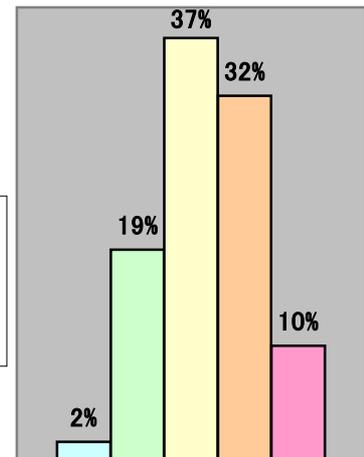
3.スピーキング力が上がった

- 非常についた
- 多少ついた
- どちらとも言えない
- あまりつかなかった
- 全くつかなかった



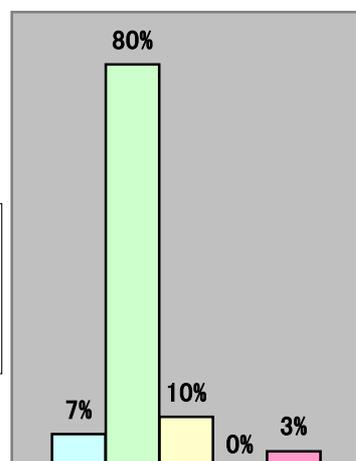
4.ライティング力が上がった

- 非常についた
- 多少ついた
- どちらとも言えない
- あまりつかなかった
- 全くつかなかった



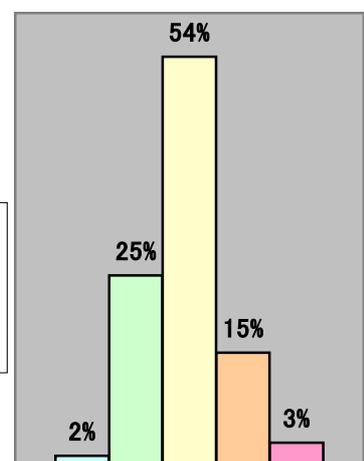
5.ボキャブラリーが増えた

- 非常に増えた
- 多少増えた
- どちらとも言えない
- あまり増えなかった
- 全く増えなかった



6.文法の理解が深まった

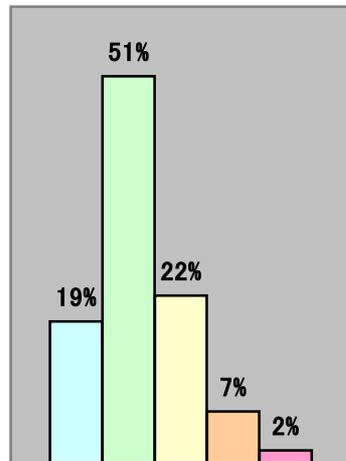
- 非常に深まった
- 多少深まった
- どちらとも言えない
- あまり深まらなかった
- 全く深まらなかった



平成18年度第1学期 CALL試行授業3クラス 59名

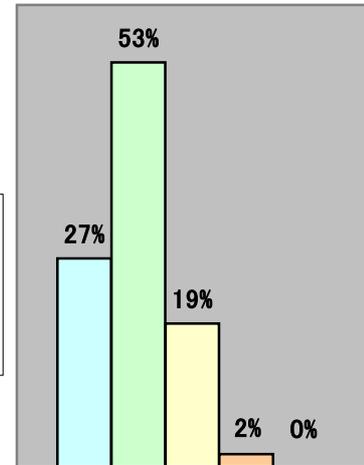
7.異文化理解に役立った

- 非常に役立った
- 多少役立った
- どちらとも言えない
- あまり役立たなかった
- 全く役立たなかった



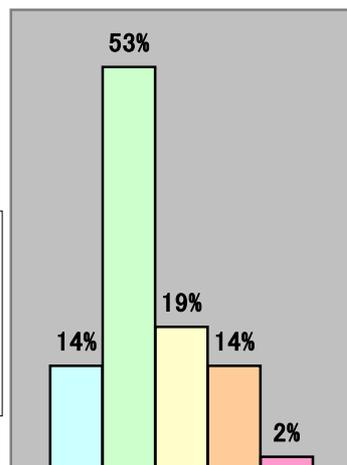
8.学習内容に興味をもてた

- 非常にもてた
- 多少もてた
- どちらとも言えない
- あまりもてなかった
- 全くもてなかった



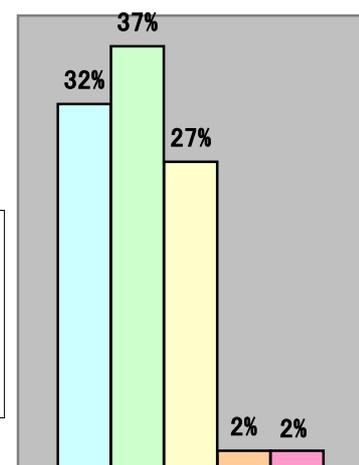
9.教材のレベルは自分に合っていた

- 非常に合っていた
- 合っていた
- どちらとも言えない
- あまり合っていなかった
- 全く合っていなかった



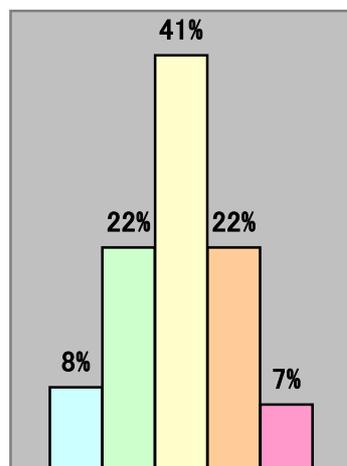
10.従来型の対面授業よりも、集中して学習できた

- 非常にできた
- 多少できた
- どちらとも言えない
- あまりできなかった
- 全くできなかった



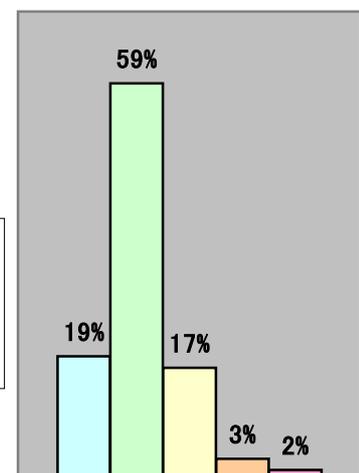
11(24).対面式授業も取り入れたほうがよかった

- 非常にそう思う
- ややそう思う
- どちらとも言えない
- あまりそう思わない
- 全くそう思わない



13(26).機会があれば今後もコンピュータで英語学習をしたい

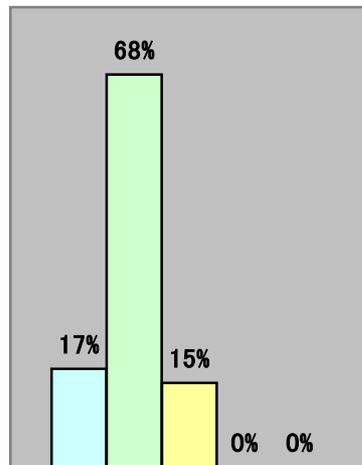
- 非常にそう思う
- ややそう思う
- どちらとも言えない
- あまりそう思わない
- 全くそう思わない



発展英語 (Listen to Me!) 2クラス 41名

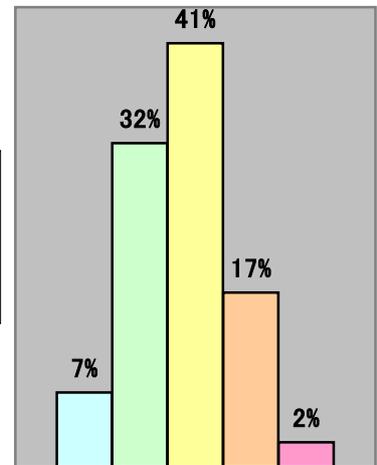
1.リスニング力が上がった

- 非常に上がった
- 多少上がった
- どちらとも言えない
- あまりつかなかった
- 全くつかなかった



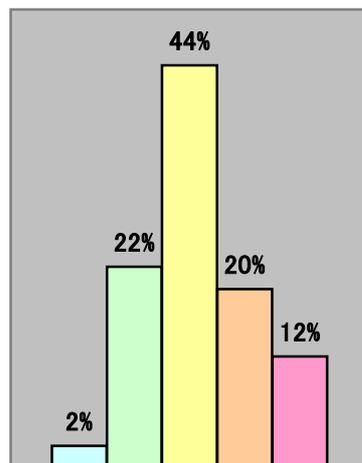
2.リーディング力が上がった

- 非常に上がった
- 多少上がった
- どちらとも言えない
- あまりつかなかった
- 全くつかなかった



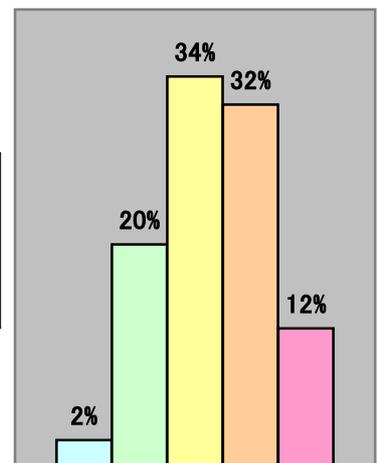
3.スピーキング力が上がった

- 非常に上がった
- 多少上がった
- どちらとも言えない
- あまりつかなかった
- 全くつかなかった



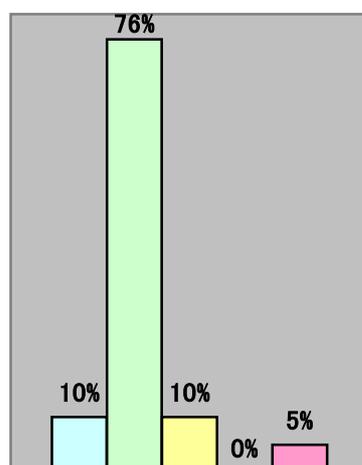
4.ライティング力が上がった

- 非常に上がった
- 多少上がった
- どちらとも言えない
- あまりつかなかった
- 全くつかなかった



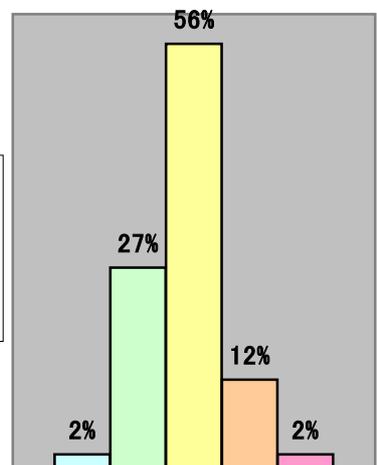
5.ボキャブラリーが増えた

- 非常に増えた
- 多少増えた
- どちらとも言えない
- あまり増えなかった
- 全く増えなかった



6.文法の理解が深まった

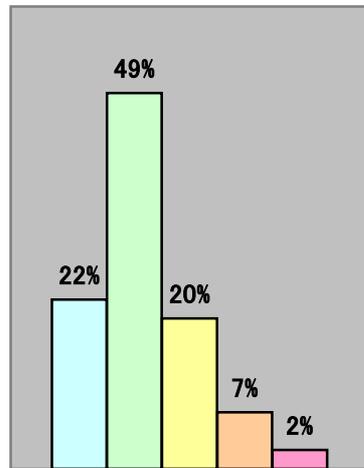
- 非常に深まった
- 多少深まった
- どちらとも言えない
- あまり深まらなかった
- 全く深まらなかった



発展英語(Listen to Me!)2クラス 41名

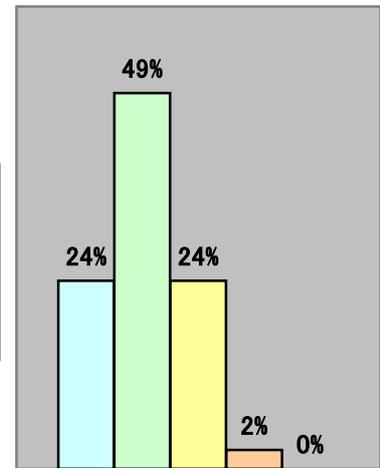
7.異文化理解に役立った

- 非常に役立った
- 多少役立った
- どちらとも言えない
- あまり役立たなかった
- 全く役立たなかった



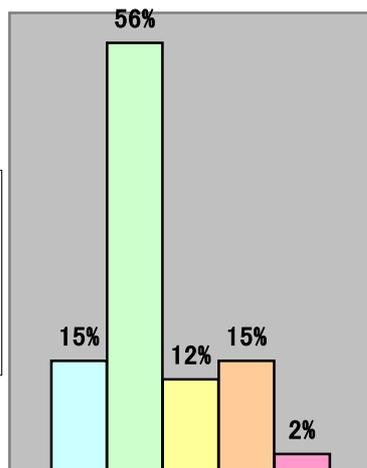
8.学習内容に興味をもてた

- 非常にもてた
- 多少もてた
- どちらとも言えない
- あまりもてなかった
- 全くもてなかった



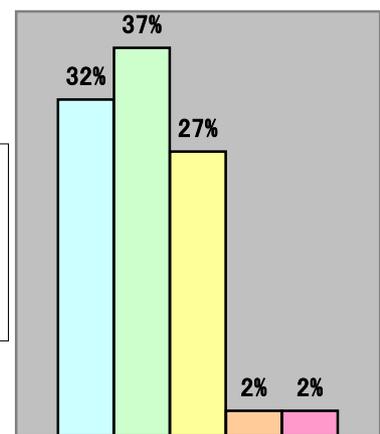
9.教材のレベルは自分に合っていた

- 非常に合っていた
- 合っていた
- どちらとも言えない
- あまり合っていなかった
- 全く合っていなかった



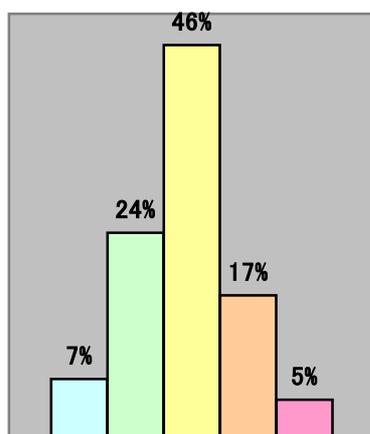
10.従来型の対面式授業よりも、集中して学習できた

- 非常にできた
- 多少できた
- どちらとも言えない
- あまりできなかった
- 全くできなかった



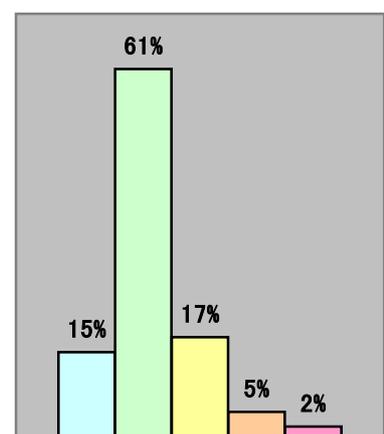
24.対面式授業も取り入れたほうがよかった

- 非常にそう思う
- ややそう思う
- どちらとも言えない
- あまりそう思わない
- 全くそう思わない



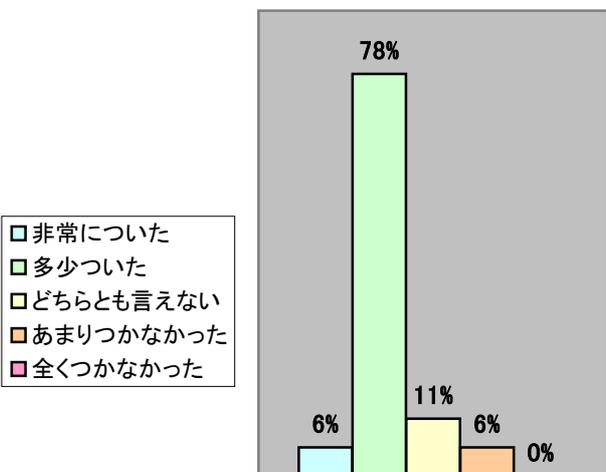
26.機会があれば今後もコンピュータで英語学習をしたい

- 非常にそう思う
- ややそう思う
- どちらとも言えない
- あまりそう思わない
- 全くそう思わない

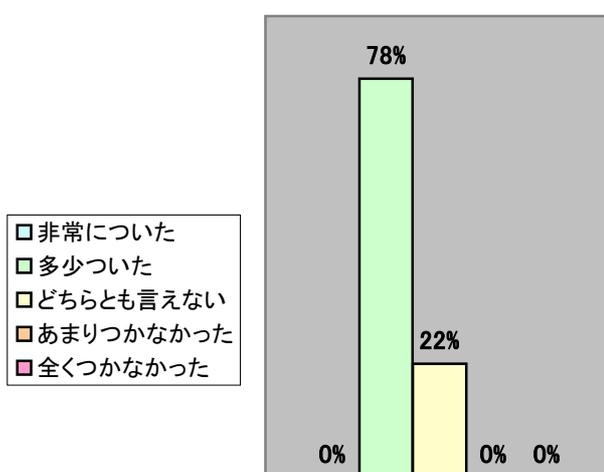


G0064 基礎英語 (NetAcademy) 18名

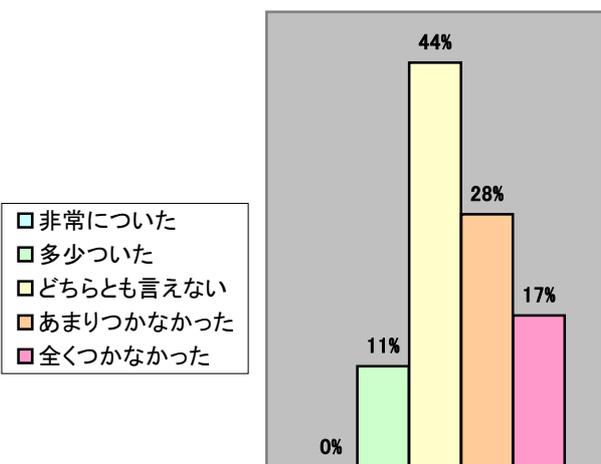
1.リスニング力が上がった



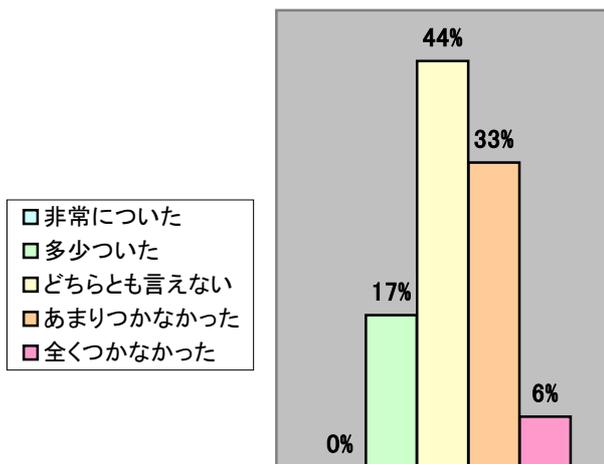
2.リーディング力が上がった



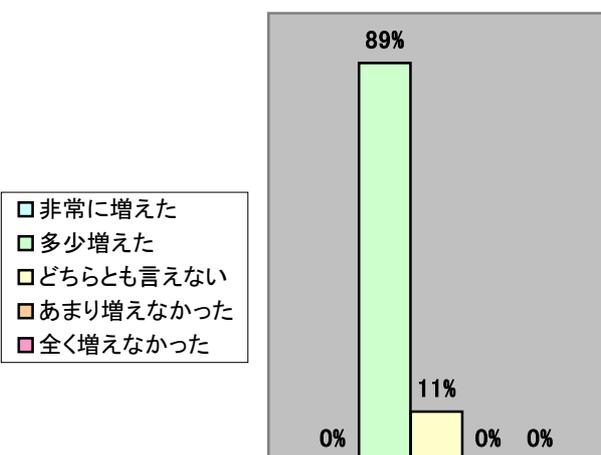
3.スピーキング力が上がった



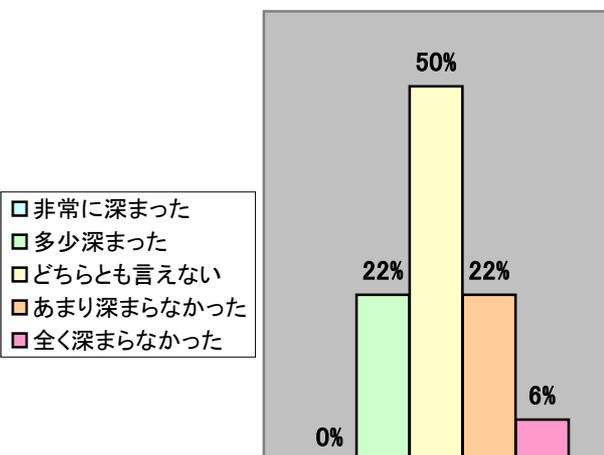
4.ライティング力が上がった



5.ボキャブラリーが増えた



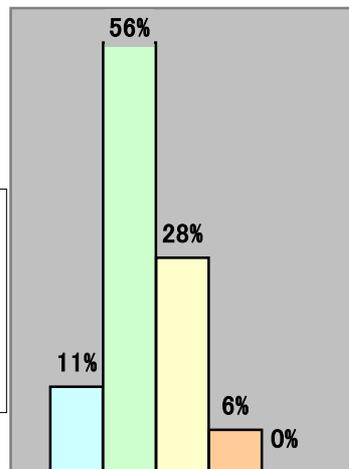
6.文法の理解が深まった



G0064 基礎英語 (NetAcademy) 18名

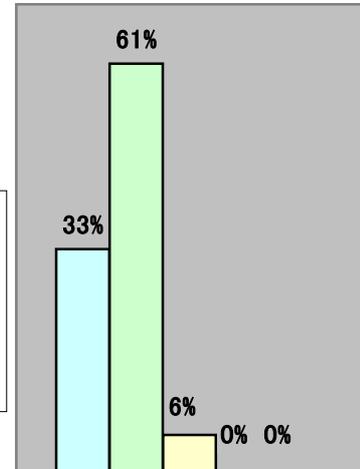
7.異文化理解に役立った

- 非常に役立った
- 多少役立った
- どちらとも言えない
- あまり役立たなかった
- 全く役立たなかった



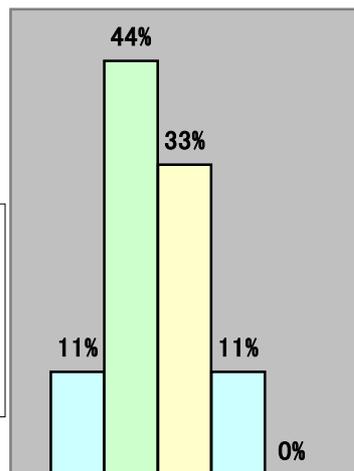
8.CALL教材の学習内容に興味をもてた

- 非常にもてた
- 多少もてた
- どちらとも言えない
- あまりもてなかった
- 全くもてなかった



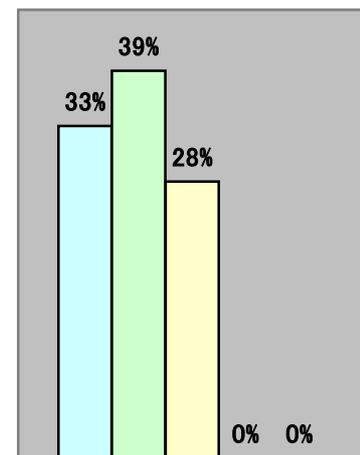
9.教材のレベルは自分に合っていた

- 非常に合っていた
- 合っていた
- どちらとも言えない
- あまり合っていなかった
- 全く合っていなかった



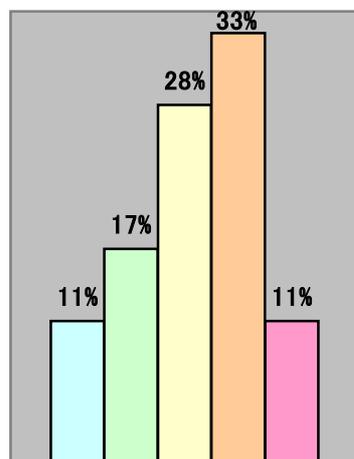
10.従来型の対面式授業よりも、集中して学習できた

- 非常にできた
- 多少できた
- どちらとも言えない
- あまりできなかった
- 全くできなかった



11.対面式授業も取り入れたほうがよかった

- 非常にそう思う
- ややそう思う
- どちらとも言えない
- あまりそう思わない
- 全くそう思わない



13.機会があれば今後もコンピュータで英語学習をしたい

- 非常にそう思う
- ややそう思う
- どちらとも言えない
- あまりそう思わない
- 全くそう思わない

